

子育てに関する調査報告書

平成17年3月

山口県PTA連合会

ご あ い さ つ

山口県PTA連合会
会長 松井 繁之

山口県PTA連合会は、平成16年9月に全県の単位PTAの皆様のご協力を得て、「子育てに関するアンケート調査」を実施しました。この度、その調査結果が報告書と言う形で刊行される運びになりましたので、全県の小中学校にお届けいたします。

最近の子ども達をとりまく社会環境の変化により、子ども達が犠牲になる事件や親子間のいたたまれない事件、不登校や引きこもりの増加など、厳しい教育環境の中で、われわれ保護者自身、子育てに対して大きな不安と疑問を抱えているのが現状です。

本アンケート調査は、山口県PTA連合会の父親母親委員会の、保護者としての素朴な意見を反映し、「子育ての現状、悩み、課題等」に焦点を当て実施しました。子どもの現状や親子関係の現実、悩みの種類や相談者、また、学校やPTAへの要望等、安堵できる健全な結果も多く出ていますが、真面目に検討すべき結果も少なからず出ています。

各PTAの皆様には「調査結果」をご活用いただき、PTAとして子育て支援の活動が積極的に展開されることを期待するものです。また、山口県PTA連合会としても、調査結果を踏まえ、組織の在り方や活動の内容等を見直す機会にしたいと考えています。

末尾になりましたが、ご多用にもかかわらず、本アンケート調査にご協力いただいたPTAの皆様及び専門的な角度から色々ご指導くださった山口県家庭教育学会の皆様にご心より感謝の意を表したいと思っております。特に報告書の作成にご尽力いただいた山口県立大学の相原次男教授には衷心よりお礼を申し上げます。

なお、本報告書は、山口県人づくり財団の助成によるものであることを申し添えます。

目 次

ごあいさつ

序 章	アンケートの目的、内容、方法、分析視点	1 ~ 4
第 1 章	子どもの日常生活と親子関係	5 ~ 16
第 2 章	家庭教育・子育ての意義や悩み等	17 ~ 30
第 3 章	子どもの学校生活の様子と 学校・教師への要望等	31 ~ 36
第 4 章	P T A 活動の意義とかかわり方	37 ~ 40
第 5 章	自由記述の内容分析	41 ~ 44
終 章	総括 - 課題と提言	45 ~ 50
経過とお礼		52
実行委員会名簿		53
アンケート票（見本）		

* ごあいさつは最終ページに掲載
ページ番号が印刷製本した報告書と一部異なります。(5 2 ・ 5 3 ページ)

序章 アンケートの目的、内容、方法、分析視点

1 アンケートの目的

最近、子どもの犯罪が増加し、その低年齢化と凶悪化が社会的な問題となっている。また、他者の痛みが分からない子ども、他者と協力できない子ども、我慢することができない子ども等、広い意味での社会性を欠いた子どもが増大している。実際に非行や犯罪に走る子どもはほんの一握りに過ぎないが、わが子については大丈夫だろうか、どのように子育てをしておけばよいのかと、子育てに不安を抱き、自信をなくしている親が増えている。

子どもは家庭をベースに、地域、学校、そしてそれらを包み込むマスコミの影響を受けながら成長している。しかし、地域の教育力の衰退とともに、家庭の教育力も低下し、その分、そのしわ寄せを受ける学校も加重負担にアップアップの状態にある。子どものしつけを含む教育はまず、家庭でしっかり展開されるべきであるが、多くの家庭は社会の消費文化やマスコミ文化にどっぷり浸かり、親自身も子どもの成長に何が必要であるかを忘れてきているらしいがある。

子どもの問題については、とかく学校や社会にその責任を転嫁する傾向があるが、家庭の責任は大きい。子どもの自己中心主義や忍耐力の欠如、意欲の低下等は、親の、また家庭教育の在り方と深く関係していると言わざるを得ない。子どもの健やかな成長の観点から、家庭ですべきことは何か、学校がすべきことは何か。古くて新しい課題ではあるが、この点を明らかにし、両者の新しい連携の在り方を模索していく時期に差し掛かっている。

この度のアンケート調査は、以上のような問題意識に立って計画されたものである。とは言え、この種の大問題を一回のアンケートで明らかにするのは不可能である。今回の子育てに関するアンケートの主要なねらいは、子どもの日常的な様子や基本的な家庭教育の内容、親子のかかわり方、子育ての悩みや子育て観等についての現状や意識を浮き彫りにし、保護者の参考に資するところにある。また、本アンケートでは、調査主体であるPTA活動の意義や評価等についても尋ねている。アンケート結果の分析を踏まえ、PTA組織を媒介にして学校と家庭がどのような協力関係をうち立てていくか、また、内容や組織面でPTA活動の活性化を如何に図っていくか。本アンケートのもう一つのねらいは、PTA活動の在り方を見直すための糸口を探ろうとするところにある。

2 アンケートの方法及び内容

(1) アンケートの方法

アンケート票は、PTAの全県組織を利用し、県下52校(小学校27校、中学校25校)に配布され、子どもを通して保護者の下に届けるといった方法をとった。なお、アンケート票配布に際しては、アンケート対象者の偏りを避けるため、県下に存在する7つの教育事務所管轄下の学校(小中あわせて6校~9校)に満遍なく行き渡るように配慮した。アンケート対象者は都市部はもちろん、農村・漁村地域の学校に通う保護者も含まれている。

アンケートの実施は平成16年9月。アンケート配布数と回収数は表1のとおりである。回収率は中学2年生の保護者の割合が86.0%と少し下がるが、平均すると92.1%である。

表1 アンケートの回収率

(上段：実数)

	配布数	回収数	回収率
小2	722	687	95.2%
小5	779	745	95.6%
中2	831	715	86.0%
全体	2332	2147	92.1%

また、アンケートに回答してくれた保護者の子どもを、学年別・性別に整理すると表2のようになる。学年別、性別とも量的にバランスの取れた回収になった。

表2 子どもの学年と性別

(上段：実数)

	男子	女子	合計
小2	357	330	687
	52.0%	48.0%	100%
小5	374	371	745
	50.2%	49.8%	100%
中2	349	366	715
	50.3%	49.7%	100%

(2) アンケートの内容

アンケート内容は全部で27問。最後に、記述式の自由意見欄を設けた。内容構成は、以下のとおりである。子どもの日常生活にかかわる設問で、「子どもが朝起きてから学校に出かけるまでの様子」「親子の会話の時間」「会話の内容」「土曜・日曜の過ごし方」等からなり、全部で8問。子育ての悩みや子育て観にかかわる設問で、「子育ての話し相手」「子どもの事で悩んでいる事」「子育てで気を付けていること」「家庭教育の役割」等、6問。子どもの学校生活の様子や学校(先生)への要望等、5問。PTAの意義やPTAと関連した行事等への参加状況に関する設問を3問。最後に、フェイスシートとして5問を設定、合計27問である。

3 対象者(回答者)の属性

アンケート対象者(回答者)は小学校2年生、5年生、また中学校2年生の子どもを持つ保護者である。回答者と子どもの関係、続柄は、表3に示すとおりである。

表3 回答者と子どもとの続柄

(上段:実数)

	父	母	祖父	祖母	その他	無回答	合計
小2	52	613	1	5	1	15	687
	7.6%	89.2%	0.1%	0.7%	0.1%	2.2%	100.0%
小5	60	663	1	5	2	14	745
	8.1%	89.0%	0.1%	0.7%	0.3%	1.9%	100.0%
中2	51	631	0	7	1	25	715
	7.1%	88.3%	0.0%	1.0%	0.1%	3.5%	100.0%
全体	163	1907	2	17	4	54	2147
	7.6%	88.8%	0.1%	0.8%	0.2%	2.5%	100.0%

アンケート票には、記入上の注意として「お子様の父または母、祖父または祖母か、その他(例えば、保護者の代理人等)の方がお答えください。」と明記していたが、結果的には、表から分かるように、回答者の圧倒的多数は母親で、全体の88.8%(父親は7.6%)を占めている。したがって、後述する本アンケート結果は、ほぼ母親によるものと考えてよい。なお、無回答者が2.5%あり、この種のアンケートとしては多い。

次に、回答者の年齢構成である。表4がそれを示す。小2では20代の保護者が5.0%存在するが、全体的に回答者は30代と40代に集中し、併せて93%近くを占めている。子どもの学年を考えれば当然だと言える。

表4 回答者の年齢構成

(上段:実数)

	20代	30代	40代	50代	60代	70代 以上	無回答	合計
小2	34	468	165	6	3	1	10	687
	5.0%	68.1%	24.0%	0.9%	0.4%	0.1%	1.5%	100.1%
小5	5	394	322	11	3	1	9	745
	0.7%	52.9%	43.2%	1.5%	0.4%	0.1%	1.2%	100.0%
中2	2	152	488	48	6	1	18	715
	0.3%	21.3%	68.3%	6.7%	0.8%	0.1%	2.5%	100.0%
全体	41	1014	975	65	12	3	37	2147
	1.9%	47.2%	45.4%	3.0%	0.6%	0.1%	1.7%	100.0%

子どもの数についてはどうか。表5に示すように、一人っ子は意外と少なく、全体で11.7%にすぎない。子どもの数は2人または3人が多く、併せて80.0%に達する。

最後に、家族の規模について見てみよう。家族の成員は4人が36.2%、5人が30.0%、併せると66.2%。全体の3分の2が4人、5人家族であることが分かる。また、7人以上

表5 回答者の子どもの数

(上段:実数)

	1人	2人	3人	4人	5人	6人	無回答	合計
小2	86	316	229	36	11	0	9	687
	12.5%	46.0%	33.3%	5.2%	1.6%	0.0%	1.3%	100.0%
小5	73	336	272	39	14	4	7	745
	9.8%	45.1%	36.5%	5.2%	1.9%	0.5%	0.9%	100.0%
中2	92	328	237	33	7	2	16	715
	12.9%	45.9%	33.1%	4.6%	1.0%	0.3%	2.2%	100.0%
全体	251	980	738	108	32	6	32	2147
	11.7%	45.6%	34.4%	5.0%	1.5%	0.3%	1.5%	100.0%

の家族も 8%以上存在している。なお、ここでは残念なことに、家族の人数だけを問い、祖父母の存在や両親の有無については聞いていない。このため、ひとり親家族や、3世代家族がどのくらいの割合で存在するのかを明らかにすることができない。

表6 家族の規模

(上段:実数)

	2人	3人	4人	5人	6人	7人以上	無回答	合計
小2	12	68	261	203	76	57	10	687
	1.7%	9.9%	38.0%	29.5%	11.1%	8.3%	1.5%	100.0%
小5	9	73	268	231	93	61	10	745
	1.2%	9.8%	36.0%	31.0%	12.5%	8.2%	1.3%	100.0%
中2	10	77	249	209	99	56	15	715
	1.4%	10.8%	34.8%	29.2%	13.8%	7.8%	2.1%	100.0%
合計	31	218	778	643	268	174	35	2147
	1.4%	10.2%	36.2%	30.0%	12.5%	8.1%	1.6%	100.0%

4 分析視点

アンケート結果は、主として次の2つの視点から分析・考察する。一つは、子どもの発達段階（小学2年生、小学5年生、中学2年生）と各質問項目とのクロス分析、もう一つは、性別（男子、女子）による分析である。各質問項目とフェイスシートのクロス分析も可能であるが、本アンケートのねらいから判断して特に必要でないので割愛した。また、回答者のほとんどが子どもの母親である。このこともあり、父の回答と母の回答の異同にはふれていない。母親によるわが子の評価、判断、思い、の分析が中心になっている。

第1章 子どもの日常生活と親子関係

1 子どもの朝の様子

家庭の中で最も基本的な生活習慣が子どもにどの程度身に付いているのか。子どもが朝起きてから学校に出かけるまでを想定し、5項目についてそれぞれ4段階で尋ねた。表1-1はその結果を示す。

表1-1 子どもの朝の様子×学年別

		する	時々する	しない	わからない	無回答
起きたとき あいさつを するか	小2	69.0%	25.9%	3.5%	0.1%	1.5%
	小5	66.0%	25.5%	7.4%	0.1%	0.9%
	小5	66.0%	25.5%	7.4%	0.1%	0.9%
	中2	56.5%	29.5%	11.3%	0.3%	2.4%
	全体	63.8%	27.0%	7.5%	0.2%	1.6%
洗顔を するか	小2	72.6%	20.5%	5.5%	0.1%	1.2%
	小5	76.5%	16.6%	5.0%	0.3%	1.6%
	中2	86.7%	7.3%	2.5%	0.8%	2.7%
	全体	78.7%	14.8%	4.3%	0.4%	1.8%
食事を するか	小2	93.0%	5.2%	0.4%	0.1%	1.2%
	小5	92.3%	5.2%	0.7%	0.0%	1.7%
	中2	90.8%	5.6%	0.8%	0.3%	2.5%
	全体	92.0%	5.4%	0.7%	0.1%	1.8%
排泄を するか	小2	65.9%	25.8%	4.9%	1.2%	2.2%
	小5	66.0%	25.6%	5.2%	1.1%	2.0%
	中2	69.2%	19.7%	4.3%	4.1%	2.7%
	全体	67.1%	23.7%	4.8%	2.1%	2.3%
出かける 前に あいさつを するか	小2	92.1%	5.8%	0.7%	0.1%	1.2%
	小5	90.5%	6.8%	1.1%	0.0%	1.6%
	中2	78.2%	15.1%	3.8%	0.6%	2.4%
	全体	86.9%	9.3%	1.9%	0.2%	1.7%

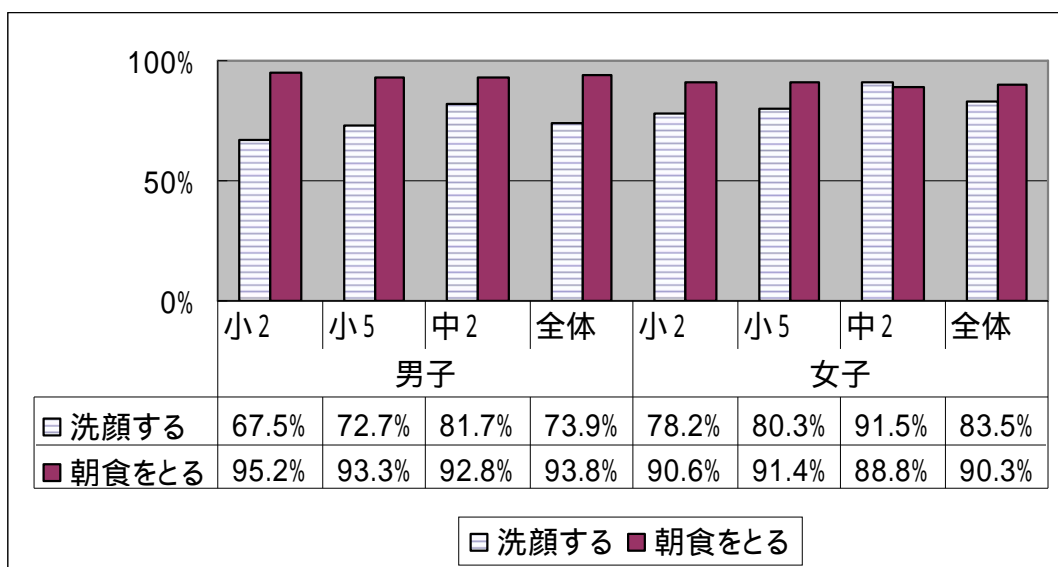
5項目は原則「する」ことが期待される内容であるが、朝起きたときにあいさつを「する」は全体で63.8%と少なく、中学生では56.5%にすぎない。しかし、学校に出かける前には「する」の割合はぐっと増え、全体で86.9%、小学生(2年生、5年生とも)では

90%を越えている。意外な結果だったのが、洗顔を「する」の割合の低さ（全体で78.7%）である。洗顔をしないということは歯磨きもしないことを意味している。最近話題になっている、朝食抜き（「時々する」「しない」）の子どもの割合はどうか。全体で6.1%と思ったよりも少ない。全体で92.0%が朝食を「する」と回答している。

4段階の尺度の一つに「わからない」を入れている。この意図は、種々の理由で朝の子どもの様子を観察できない、または関心を示さない親を想定したものである。結果的には5項目とも「わからない」の割合は極端に低く、「する」「しない」はともかく、ほとんど全ての親は子どもの朝の様子を知っていることが明らかになった。

次に、性別ではどのような違いが見られるのか。「洗顔する」と「朝食事をする」の2項目から男女差を見てみよう（図表1-1参照）。なお、ここでは、2項目とも4段階の「する」の割合だけを示す。

図表1-1 子どもの朝の様子（洗顔する、朝食を摂る）×性別



「洗顔する」については、男子は全体で73.9%、女子は83.5%と10ポイント近くの開きがある。男女とも学年があがるにつれて割合は増えているが、小学生2年段階の10ポイントの差は中学生2年時点でも維持されている。朝、顔を洗うという当たり前のしつけは、男子よりも女子の方に行き届いていることが分かる。それにしても、中学2年の男子の18%強が、女子の8%強が顔を洗わずに学校に行っているのは驚きである。「朝食事をする」についてはどうか。全体で見ると、男子93.8%、女子90.3%で女子の割合が低い。中学2年の女子では88.8%と90%を割っている。男女間の開きは大きくないが、女子は10人に1人近くが朝食をせずに学校に通っていることになる。この数字は決して低いとは言えない。

次に、内容は前者と多少ダブるが、5つの項目を設定（3段階評価）し、子どもがどの程度「自主的」にできるかを尋ねた。表1-2は、その結果を示す。

まず、朝、自分で起きることができるか。「ほぼできる」は全体で34.1%。3分の1強にすぎない。中学2年生でも42.7%と半数にも満たない。毎朝、母親か父親に起床を促され、せかされている様子が伺える。「身支度」「学校の準備」については、自主的に「ほぼできる」割合が一段と高くなる。両者とも全体で90%前後に達する。当然ながら、学年が進むにつれ自主的にできる割合も高くなっている。問題は、「宿題」「勉強」の割合である。前者の宿題は、「ほぼできる」が全体で67.3%。小学5年生69.4%、中学2年生73.1%で両者の間に差は少ない。宿題の量にもよるが、30%前後の子どもが宿題をせずに学校に行くか、親やその他の助けによってこなしていることになる。宿題以外の勉強や予習になると、自主的にできる子どもは極端に少なくなり、全体で36.8%。中学2年生でも44.5%と半数に届かない。高校受験までにはまだ時間があると考えればうなずける。

表1 - 2 自主的にできる×学年別

		ほぼできる	時々できる	あまりできない	無回答
朝自分で おきる	小2	28.4%	40.0%	30.3%	1.3%
	小5	31.3%	40.5%	27.1%	1.1%
	中2	42.7%	29.7%	25.6%	2.1%
	全体	34.1%	36.7%	27.6%	1.5%
身支度	小2	86.9%	9.9%	2.0%	1.2%
	小5	94.8%	2.7%	1.5%	1.1%
	中2	96.1%	1.7%	0.1%	2.1%
	全体	92.7%	4.7%	2.0%	1.4%
学校の 準備	小2	82.0%	13.5%	3.2%	1.3%
	小5	92.1%	5.4%	1.3%	1.2%
	中2	95.1%	2.0%	0.6%	2.4%
	全体	89.8%	6.8%	1.7%	1.6%
宿題	小2	59.0%	30.6%	9.2%	1.3%
	小5	69.4%	23.6%	5.9%	1.1%
	中2	73.1%	15.9%	8.5%	2.4%
	全体	67.3%	23.3%	7.8%	1.6%
勉強	小2	27.8%	44.4%	26.5%	1.3%
	小5	37.7%	38.9%	22.4%	0.9%
	中2	44.5%	32.4%	20.8%	2.2%
	全体	36.8%	38.5%	23.2%	1.5%

「自主的に」できる内容を、今度は男女別に見てみよう。図表1 - 2は、「3段階評価のうち「ほぼできる」の割合のみを示す。

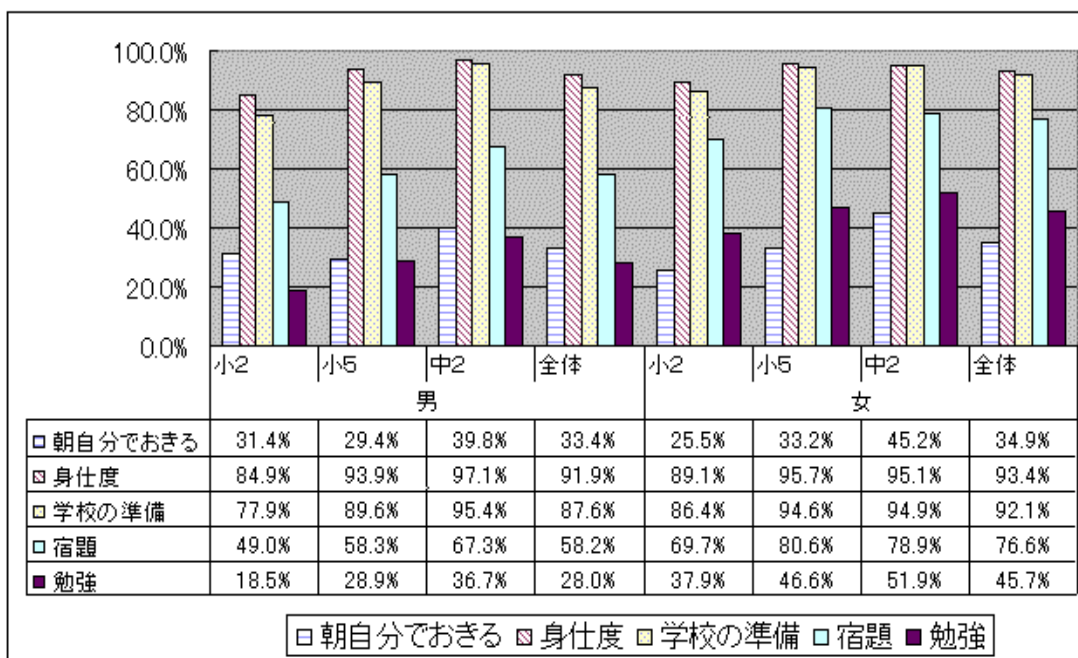
「自分で朝起きる」「身支度」「学校の準備」について「ほぼできる」割合は、男女の間に

差はあまり見られない。しかし、「宿題」「勉強」については、男女間に大きな数字の開きが見られる。

「宿題」については、男子が全体で 58.2%、女子が 76.6%。両者の間に 18 ポイントの開きがある。男子に比べ女子の方が真面目に課題をこなしていることが分かる。学年と性別をクロスさせると、小学 2 年生では男女間に 20.7 ポイント、小学 5 年生では 23.3 ポイントの開きが見られる。中学生になるとさすがに両者の差は縮小してくるが、それでも 10.4 ポイントも女子の割合が高い。

宿題以外の「勉強」になると、男女とも自主的にできる割合は減少してくる。しかし、ここでも男女差は縮まらない。全体で見ると、男子は 28.0%、女子 45.7%と両者の間に 17.7%の開きが、中学生でも男子 36.7%、女子 51.9%と 15.2%の開きが見られる。女子が男子に比べて勉強好きとは一概に言えないが、男女の数字の開きは少なからず、学校の成績にも反映されてくる。

図表 1 - 2 自主的にできる × 性別



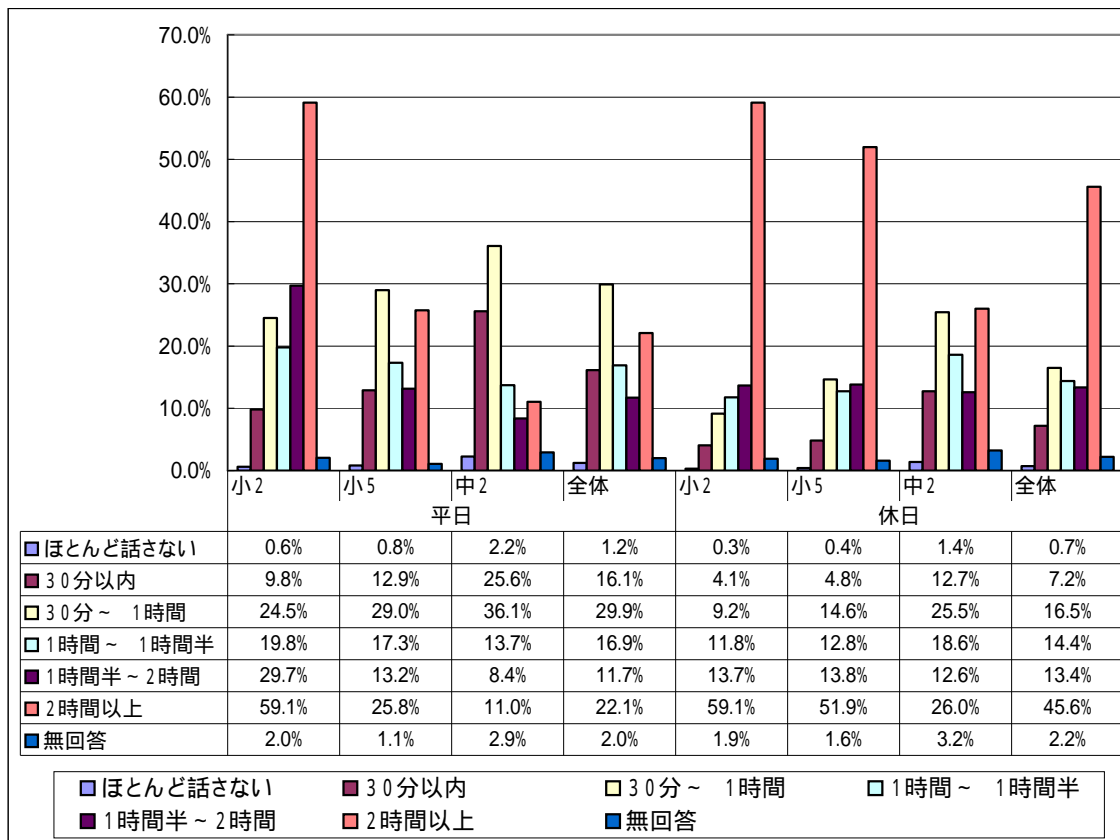
2. 親子の会話時間とその内容

家庭生活は基本的には親子のコミュニケーションによって成立している。親は平日また休日に、子どもとどのくらい会話をしているのか。図表 1 - 3 は、その結果を示す。

平日をまず、全体で見ると、会話時間は、「30分～1時間」が最も多く 29.9%、続いて「2時間以上」で 22.1%。「ほとんど話さない」はわずか 1.2%にすぎないが、これを含め「30分以内」を見ると 17.3%になる。言うまでもなく、学年差（発達段階差）も大きい。小学 2 年生では、「2時間以上」は 29.7%と 3 割近くに達するが、中学 2 年生では 11.0%で 1 割強にすぎない。逆に、「30分以内（ほとんど話さないを含む）」をみると、前者は

10.4%、後者 27.8%となる。思春期に入ったとはいえ、中学2年生の親との会話時間は短いと言わざるを得ない。

図表 1 - 3 親子の会話時間（平日、休日）×学年別



休日ではどうか。図表から分かるように、親子の会話時間は当然長くなっていく。各学年とも、親子の会話時間が「30分以内（ほとんど話さないを含む）」の割合は、平日のそれと比較して半減し、逆に「2時間以上」親子で会話する割合は倍増している。

親子の会話時間の長短は学年別だけでなく、性別による違いも見られる(表1-3参照)。

まず、平日を全体で見ると、「30分以内」が男子19.9%、女子14.7%。中学2年生では男子33.2%、女子22.7%と高い。「2時間以上」は男子17.7%、女子26.6%で、親との会話時間は女子の方が男子に比べ相対的に長いことが分かる。休日についてもほぼ同様なことが言える。

表 1 - 3 親子の会話時間の長短 × 性別

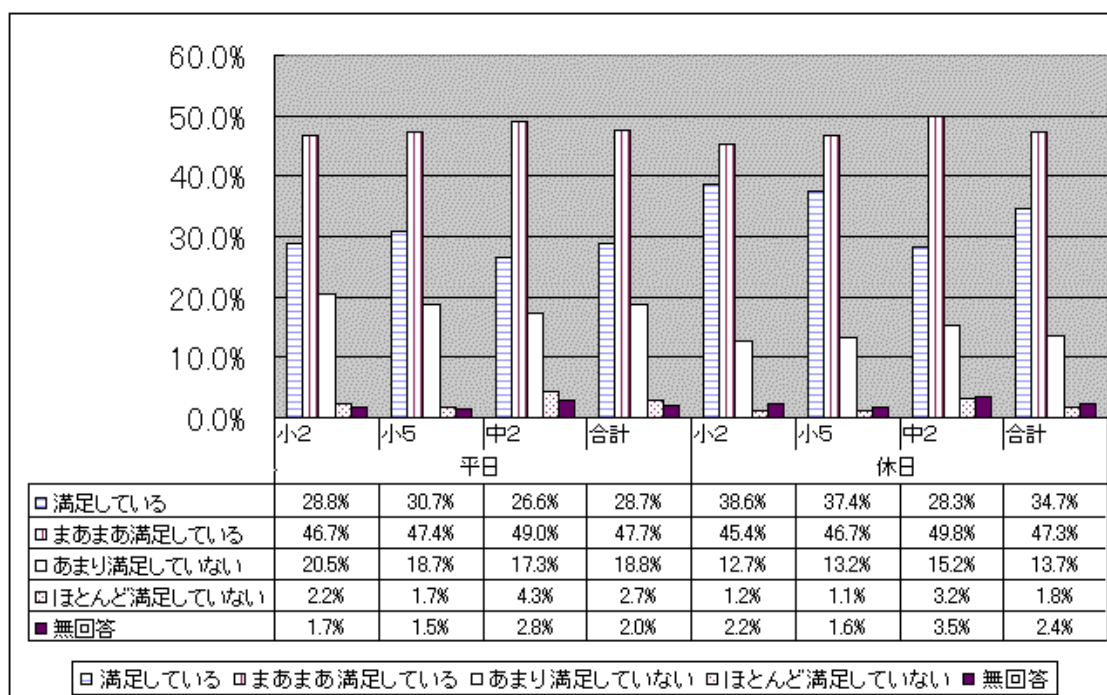
(平日)

(休日)

		30分以内	2時間以上			30分以内	2時間以上
男子	小2	12.6%	25.2%	男子	小2	4.8%	55.5%
	小5	14.4%	20.9%		小5	6.7%	48.1%
	中2	33.2%	6.6%		中2	18.9%	18.3%
	全体	19.9%	17.7%		全体	10.0%	40.9%
女子	小2	7.9%	34.5%	女子	小2	3.9%	63.0%
	小5	12.7%	30.7%		小5	3.5%	55.8%
	中2	22.7%	15.3%		中2	9.6%	33.3%
	全体	14.7%	26.6%		全体	5.7%	50.3%

以上、親子の会話の時間を見てきたが、親はその時間（平日、休日）にどの程度満足しているのか。この点を学年別に見たのが、図表 1 - 4 である。

図表 1 - 4 子どもとの会話時間の満足度 × 学年別



平日の会話時間に「満足」（「満足している」＋「まあまあ満足している」）の親は全体で76.4%、「不満」（「あまり満足していない」＋「ほとんど満足していない」）は21.5%で、4人に3人の親は「満足」と回答している。ここでは、学年差はほとんど見られないが、小学2年生の親の「満足」の割合が一番低く、「不満」の割合が一番高いのが興味を引く。

休日になると、会話時間が相対的に増えることも作用し、「満足」の割合は全体で 82.0% と高くなる。当然「不満」の割合が下がり、15.5%となっている。中学 2 年生では、平日・休日とも小学生と比較して親との会話の時間が短いにもかかわらず、平日では「満足」の割合は小学生の親と変わらない。思春期の子どもであり、平日はこの程度でよいと考えているからであろう。しかし、休日の「満足」の割合は小学生と比べ 6 ポイント近く低い。「不満」の割合も平日と比べ 3 ポイント弱下がったにすぎない。中学 2 年生の親は、もっと子どもとの会話の時間が必要だと考えている証拠でもある。

では、満足度に男女差は見られるのか。会話時間の満足度を性別で見たのが表 1 - 4 である。

表 1 - 4 会話時間の満足度×性別

		満足		不満	
		男子	女子	男子	女子
平日	小 2	74.80%	76.40%	24.90%	20.30%
	小 5	76.70%	79.50%	22.50%	18.30%
	中 2	75.50%	75.50%	24.10%	19.40%
	合計	75.60%	76.20%	23.80%	19.30%
休日	小 2	82.10%	86.10%	17.40%	10.00%
	小 5	84.20%	84.10%	15.00%	13.50%
	中 2	77.10%	79.00%	21.80%	15.30%
	合計	81.20%	83.00%	18.00%	13.00%

表から明らかなように、平日における「満足」(「満足している」+「まあまあ満足している」)の割合には男女の違いはほとんど見られない。しかし、「不満」(「あまり満足していない」+「ぜんぜん満足していない」)になると、全体で男子 23.8%、女子 19.3%と若干の数字の開きが見られる。休日についても、全体の「満足」の割合に男女の違いは少ないが、「不満」では男女の間に 5 ポイントの差が出ている。平日・休日とも、男子をもつ親の不満の度合いが高くなっている。会話時間の男女差を考えれば当然だとも言える。

以上、親子の会話の時間とその満足度を見てきたが、今度は会話の内容について見てみたい。表 1 - 5 - 1 は、「あなたはお子様と、次のことについてどのくらい話されますか」という質問(4段階評価)に対する回答を整理したものである。

親子の会話の内容(8項目)のうち、「話す」(「よく話す」+「ときどき話す」)割合の高い項目のベスト 3 を見ると、全体では、「学校のこと、教師のこと」がトップ(86.4%)、続いて「命の大切さ」(80.0%)、「勉強・成績のこと」(77.8%)の順である。前 2 者については、小学生(2年生、5年生)の「話す」割合が中学 2 年生のそれを上回る。「学校のこと、先生のこと」では 10 ポイント前後の開きが、「命の大切さ」では 6~9 ポイントの差が見られる。「勉強・成績のこと」になると逆に、中学生の方が小学生の「話す」割合を 7~15 ポイント上回っている。発達段階による違いと考えてよいであろう。

表1-5 1 親子の会話の内容×学年別

		よく話す	時々話す	あまり話さない	ほとんど話さない	無回答
将来の夢	小2	10.5%	56.3%	24.0%	7.3%	1.9%
	小5	12.1%	59.1%	20.5%	7.1%	1.2%
	中2	13.0%	57.6%	17.6%	8.7%	3.1%
	全体	11.9%	57.7%	20.7%	7.7%	2.0%
命の大切さ	小2	26.5%	57.5%	10.9%	3.1%	2.0%
	小5	25.8%	55.6%	14.2%	2.8%	1.6%
	中2	19.6%	55.4%	16.8%	5.7%	2.5%
	全体	23.9%	56.1%	14.0%	3.9%	2.0%
進路	小2	4.9%	19.4%	38.0%	34.9%	2.8%
	小5	8.6%	41.5%	36.1%	12.3%	1.5%
	中2	19.6%	61.0%	13.8%	3.2%	2.4%
	全体	11.1%	40.9%	29.3%	16.5%	2.2%
勉強・成績	小2	19.4%	50.9%	21.4%	5.7%	2.6%
	小5	23.5%	54.4%	17.0%	3.4%	1.7%
	中2	28.7%	56.4%	10.2%	2.4%	2.4%
	全体	23.9%	53.9%	16.2%	3.8%	2.2%
学校・先生	小2	50.9%	39.3%	6.1%	1.5%	2.2%
	小5	49.1%	40.3%	8.1%	1.1%	1.5%
	中2	33.1%	46.4%	14.7%	2.9%	2.8%
	全体	44.4%	42.0%	9.6%	1.8%	2.1%
スポーツクラブ部活	小2	16.6%	22.6%	17.5%	37.8%	5.5%
	小5	38.5%	30.7%	15.6%	13.2%	2.0%
	中2	45.7%	38.5%	9.2%	4.1%	2.5%
	全体	33.9%	30.7%	14.1%	18.0%	3.3%
趣味	小2	23.0%	44.0%	22.1%	8.6%	2.3%
	小5	22.4%	42.8%	25.5%	7.9%	1.3%
	中2	13.0%	42.7%	31.2%	9.9%	3.2%
	全体	19.5%	43.1%	26.3%	8.8%	2.3%
親の生き方	小2	8.6%	30.7%	36.7%	21.7%	2.3%
	小5	8.7%	39.1%	34.1%	16.9%	1.2%
	中2	8.4%	36.2%	35.7%	17.1%	2.7%
	全体	8.6%	35.4%	35.4%	18.5%	2.0%

ところで、この表で気になるのは、下位に位置づけられた項目である。最下位（全体）

は「親の生き方」で、「話す」割合は44.0%、続いて「進路(進学・就職)」52.0%である。後者の項目については、中学2年生では80.6%と高いが、小学2年生ではわずか24.3%、5年生ではかなり割合が上昇し50.1%になっている。この数値の開きは発達段階から見て当然であり、むしろ健全な姿である。問題は、「親の生き方」についての「話す」割合の低さである。8項目の中で唯一、「話さない」(「あまり話さない」+「ほとんど話さない」)割合(53.9%)が「話す」割合(44.0%)を上回った項目である。いつも話す内容ではないことかも知れないが、「話す」割合は低いと言わざるを得ない。

親子の会話の内容に性別による違いがあるのか。この点を見たのが、表1-5-2である。なお、表には、「よく話す」「時々話す」の割合のみを示す。

表1-5-2 会話の内容×性別

(数字：%)

		将来の夢		命の大切さ		進路		勉強・成績	
		よく話す	時々話す	よく話す	時々話す	よく話す	時々話す	よく話す	時々話す
男子	小2	8.5	55.2	26.9	59.1	3.6	20.4	18.5	52.4
	小5	11.8	56.4	24.1	58	7.8	41.4	23.5	57.2
	中2	11.7	55	16.6	57.3	20	61.3	28.9	56.7
	全体	10.7	55.6	22.6	58.1	10.4	41.4	23.6	55.5
女子	小2	12.7	57.6	26.1	55.8	6.4	18.2	20.3	49.4
	小5	12.4	61.7	27.5	53.1	9.4	41.5	23.5	51.5
	中2	14.2	60.1	22.4	53.6	19.1	60.7	28.4	56
	全体	13.1	59.9	25.3	54.1	11.8	40.9	24.2	54.5
		学校・先生		スポーツ・部活		趣味		親の生き方	
		よく話す	時々話す	よく話す	時々話す	よく話す	時々話す	よく話す	時々話す
男子	小2	46.8	41.7	21.6	25.2	26.7	40.1	7.8	31.4
	小5	41.4	45.2	42.8	32.4	20.6	43.6	9.1	38.5
	中2	24.6	51.0	44.4	41.3	12.6	41.8	7.5	35.5
	全体	37.8	45.9	36.3	32.9	20.0	41.9	8.2	35.2
女子	小2	55.5	36.7	11.2	19.7	19.1	49.4	9.4	30.0
	小5	56.9	35.3	34.2	29.1	24.3	42.1	8.4	39.6
	中2	41.3	42.1	47.0	35.8	13.4	43.4	9.3	36.9
	全体	51.1	38.1	31.5	28.5	18.9	44.4	9.0	35.7

親子で「話す」内容のベスト3は、男女とも(全体)「学校のこと、先生のこと」、続いて「命の大切さ」、「勉強・成績のこと」の順である。逆に、下位の2項目も男女とも、「親の生き方」、「進路(進学・就職)」の順である。上位、下位とも男女によるポイントの開きは見られない。

ここでは、次の2項目について男女の違いを見ておこう。一つは、「将来の夢」についての「話す」割合である。男子は全体で66.3%、女子は73.0%と両者の間に7ポイント近くの開きがある。回答者の属性(9割近くが母親)から、「将来の夢」については息子以上に娘の方が語り易いのかも知れない。もう一つは、「スポーツ少年団・クラブ活動・部活動」である。ここでは逆に、男子の「話す」割合が女子のそれをかなり上回っている(全体で男子69.2%、女子60.0%)。スポーツへの志向性は女子よりも男子に強いことを考えれば、この数字の開きは理解できる。ただ、小学2年生ではクラブ活動や部活動が存在しないことから、親子で「話す」割合が極端に低くなっている(男子36.8%、女子30.9%)。一方、中学2年生では部活動が準義務化されていることもあり、男女とも親と「話す」割合が80%を越えている(男子85.7%、女子82.8%)。

3 子どもの土曜日の過ごし方

次に視点を変えて、子どもの土曜日の過ごし方について尋ねた。15項目の活動を設定し、もっとも最近の土曜日の、子どもの主な過ごし方について答えてもらった(3つまで可)。表1-6-1は、その結果を示す。

上位5位までをまず、全体で見えてみると、トップは8「テレビ・ビデオをみた」で40.6%、続いて5「スポーツ少年団活動・部活」(34.7%)、9「家でゲーム」(30.2%)、4「漫画や読書」(24.1%)、15「その他」(22.0%)の順である。家でゲームをする子どもの割合が多いのが気になる。また、その他の割合も予想したより高く、活動が多様化しているのが分かる。逆に、下位グループを見ると、最下位は5「ボランティア活動」(0.5%)、続いて10「ゲームセンターに行った」(1.3%)、1「地域活動に参加」(4.1%)である。山口県の地域性も作用してか、ゲームセンターで遊ぶ子どもが少ない。

表1-6-1 子どもの土曜日の過ごし方×学年別

(数字：%)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
小2	5.4	20.2	18.3	15.0	14.0	0.3	1.3	47.0	31.9	2.3	2.0	5.8	25.6	20.4	30.9
小5	5.6	19.6	18.0	27.9	34.2	0.4	3.2	38.5	32.1	1.2	5.5	5.9	18.3	15.0	20.7
中2	1.4	20.4	9.1	29.0	55.1	0.8	11.6	36.6	26.6	0.4	10.4	6.7	9.4	10.5	15.7
全体	4.1	20.0	15.4	24.1	34.7	0.5	5.4	40.6	30.2	1.3	6.0	6.1	17.7	15.2	22.0

- 1 地域活動に参加した
(子ども会活動等)
- 2 塾や習い事に通った
- 3 宿題や予習、受験勉強などした
- 4 漫画を読んだり、読書をした
- 5 スポーツ少年団の活動・部活
- 6 ボランティア活動に参加した
- 7 音楽を聴いた
- 8 テレビ・ビデオをみた

- 9 家でゲームをした
(テレビ・パソコン)
- 10 ゲームセンターに行った
- 11 家でパソコンをした
- 12 なにもせず家でのんびり
- 13 家族団らんすごした
- 14 町にでかけた
- 15 その他

好ましい傾向である。ただ、他者への役立ち活動（ボランティア活動）や地域活動（子ども会活動を含む）については、つい最近の土曜日に限定したこともあるが、参加した子どもの割合は低いと言わざるを得ない。

学年別ではどうか。小学生（2年生、5年生とも）では「テレビ・ビデオ」が第1位を占め、中学生では「スポーツ少年団・部活」がトップ（55.1%）に位置している。内容的には部活への参加だと思われる。小学2年生では、「その他」の活動の割合（30.9%）が高く、中学生のそれ（15.7%）と比較すると、14ポイントの差がある。また、小学2年生では、「家族だんらん」の割合が25.6%（小学5年生18.3%、中学2年生9.5%）、「町にでかける」は20.4%（それぞれ15.0%、10.5%）と他の学年と比べて高い。親子で一緒に過ごす時間は、低学年ほど長いことを実証している。

子どもの土曜日の過ごし方で特に注目したいのは、塾通いや自宅での勉強の実態である。「塾や習い事」については、学年を問わず20%前後で思ったよりも高くない。自宅での「宿題や予習、受験勉強」についてはどうか。不思議なことに、小学生の割合が18%前後であるの対して、中学2年生ではわずか9%強にすぎない。中学2年生は、いわゆる勉強とのかかわりが少ないことが分かる。テレビやビデオの視聴は置くとしても、部活や漫画やゲームに多くの時間を割いているからであろう。

次に、土曜日の過ごし方を性別（表1-6-2参照）で見てみよう。

表1-6-2 子どもの土曜日の過ごし方×性別

（数字：％）

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
男 子	小2	3.1	17.4	18.5	12.9	19.6	0.0	0.3	48.7	45.7	3.1	1.7	2.8	25.2	19.3	30.3
	小5	7.2	15.2	14.7	23.8	45.7	0.5	1.1	37.7	44.1	1.9	5.3	4.0	16.3	10.7	19.0
	中2	1.1	15.5	6.9	26.9	63.3	0.3	8.9	30.1	42.7	0.9	6.6	6.0	9.5	7.5	17.5
	全体	3.9	16.0	13.4	21.2	42.8	0.3	3.3	37.9	44.2	1.9	4.5	4.2	17.0	12.5	22.2
女 子	小2	7.9	23.3	18.2	17.3	7.9	0.6	2.4	48.5	17.0	1.5	2.4	9.0	26.1	21.5	31.5
	小5	4.0	24.0	21.3	32.1	22.6	0.3	5.4	39.4	19.9	0.5	5.7	7.8	20.2	19.4	20.8
	中2	1.6	25.1	11.2	30.9	47.3	1.4	14.2	42.9	11.2	0.0	13.9	7.7	9.3	13.4	13.9
	全体	4.4	24.2	16.9	27.1	26.5	0.7	7.5	43.4	16.0	0.7	7.5	8.2	18.3	18.0	21.7

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 1 地域活動に参加した
（子ども会活動等） | 9 家でゲームをした
（テレビ・パソコン） |
| 2 塾や習い事に通った | 10 ゲームセンターに行った |
| 3 宿題や予習、受験勉強などした | 11 家でパソコンをした |
| 4 漫画を読んだり、読書をした | 12 なにもせず家でのんびり |
| 5 スポーツ少年団の活動・部活 | 13 家族団らんですごした |
| 6 ボランティア活動に参加した | 14 町にでかけた |
| 7 音楽聴いた | 15 その他 |
| 8 テレビ・ビデオをみた | |

まず、男子の上位5位までを見ると、トップは「家でゲーム」で44.2%、続いて2位以下は、「スポーツ少年団の活動・部活」(42.8%)、「テレビ・ビデオ」(37.9%)、「その他」(22.2%)、「漫画・読書」(21.2%)の順である。女子ではどうか。第1位は「テレビ・ビデオ」で43.4%、2位以下は、「漫画・読書」(27.1%)、「スポーツ少年団の活動・部活」(26.5%)、「塾や習い事」(24.2%)、「その他」(21.6%)の順である。男女間の土曜日の過ごし方には、順位も割合においてもかなりの違いがあることが分かる。

性別で見た場合の最も大きな違いは、男子ではトップの座にある「家でゲーム」が、女子では9位と低く(16.0%)、両者の間には28ポイント以上の開きが見られることである。ゲームは男子の遊びと見てよいであろう。

また、女子では4位の「塾や習い事」が男子では7位(16.0%)に位置し、両者間に8ポイントの差がある。中学段階では男女とも、もう少し割合が高くなると予想したが、結果的には他の学年とほとんど変わりなかった。「スポーツ少年団の活動・部活」では、男女とも5位までに挙がっているが、両者の割合の開きは大きく、男子が女子を16ポイント以上引き離している。この項目を学年別で見ると、男女とも中学2年生の割合(男子63.3%、女子47.3%)が一番高い。しかし、ここでも両者の間に16ポイントの開きが見られる。

第2章 家庭教育・子育ての意義や悩み等

1 子育ての悩みや相談相手

親は日常的な「子育て」をどのように感じ取っているのだろうか。5つの項目を設定し、それぞれ4段階で答えてもらった。表2-1は、その結果を示す。

表2-1 子育てについての今の思い×学年別

		そう思う	少しそう 思う	あまり 思わない	全然思 わない	無回答
自分を成長させて くれる	小2	59.1%	30.6%	7.3%	0.7%	2.3%
	小5	59.5%	30.2%	7.1%	1.1%	2.1%
	中2	53.6%	34.5%	8.0%	1.0%	2.9%
	全体	57.4%	31.8%	7.5%	0.9%	2.5%
一緒にいるだけで 楽しい	小2	57.6%	35.8%	4.4%	0.1%	2.0%
	小5	61.6%	31.7%	4.4%	0.3%	2.0%
	中2	53.3%	35.8%	6.7%	0.3%	3.9%
	全体	57.6%	34.4%	5.2%	0.2%	2.7%
時々逃げ出したくなる	小2	7.9%	31.3%	33.2%	25.0%	2.6%
	小5	5.1%	28.6%	32.6%	31.3%	2.4%
	中2	4.1%	25.7%	32.3%	34.1%	3.8%
	全体	5.6%	28.5%	32.7%	30.2%	2.9%
しつげに自信がなく不安である	小2	12.7%	45.3%	29.8%	9.6%	2.6%
	小5	7.4%	43.2%	34.0%	12.8%	2.7%
	中2	5.5%	40.0%	36.8%	14.4%	3.4%
	全体	8.4%	42.8%	33.6%	12.3%	2.9%
自分の時間が持てないので不満	小2	4.1%	30.3%	42.2%	21.1%	2.3%
	小5	2.8%	25.1%	38.1%	31.4%	2.6%
	中2	2.7%	14.7%	43.5%	35.8%	3.4%
	全体	3.2%	23.3%	41.2%	29.6%	2.7%

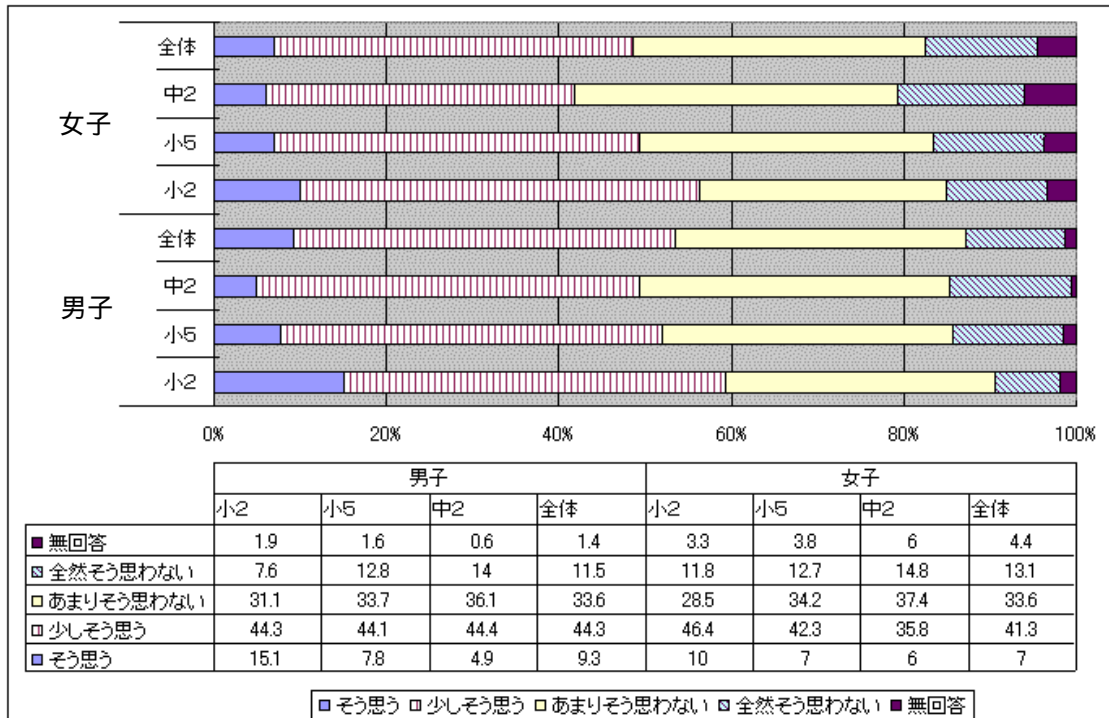
子育ては「自分を成長させる」については、4段階の「そう思う」の割合が全体で57.4%と高く、これに「少しそう思う」をプラスすると89.2%に達する。「一緒にいるだけで楽しい」についても「そう思う」の割合は5割を越え、57.6%。これに「少し思う」を加算すると92.0%になる。上記2項目については学年差（発達段階差）は見られない。ほとんどの親は、子育てを肯定的に捉えていることが分かる。

とはいえ、子育ては何の悩みもなく進んでいるのではない。子育てには知識や技術、またエネルギーや体力が求められる。このことは、子どもが学校に通うようになっても同様である。子育てから「時々逃げ出したくなる」について、「そう思う」の割合は決して高くない(全体で5.6%)が、「少しそう思う」を加えると全体で34.1%と、3人に1人が「時々逃げ出したくなる」と答えている。その理由の一つが子育ての自信のなさである。「しつげに自信がなく不安」の項目で、「そう思う」割合は全体で8.4%、「少しそう思う」は42.8%、合計で51.2%と半数を超える。「自分の時間が持てないので不満」については、「そう思う」の割合は極端に少ないが、それでも「少しそう思う」をプラスすると26.5%になる。4人に1人以上が自分の時間が持てないことに不満を表明している。

ところで、上記3項目については学年差が少なからず存在する。「時々逃げ出したくなる」では、「思う」(「そう思う」+「少しそう思う」)の割合は小学2年生39.2%、中学2年生29.8%で両者の間に9.4ポイントの開きがある。「しつげに自信がなく不安」については、「思う」の割合は前者58.0%、後者45.5%で両者間のポイント差は12.5に拡大する。「自分の時間が持てないので不満」の項目については、「思う」の割合の学年差(小学2年生34.4%、中学2年生17.4%)はさらに開き、17ポイントになる。総じて、子どもの学年が低いほど親の子育て不安や不満が相対的に高いことが分かる。

子育てについての今の思いを性別でクロスさせてみたが大きな違いは見られなかった。ここでは、「しつげに自信がなく不安」の項目だけを性別に見ておきたい。

図表2 - 1 しつげの自信がなく不安×性別



表から分かるように、「思う」(「そう思う」+「少しそう思う」)の数字で見ると、全体で男子53.6%、女子48.9%と僅かではあるが前者の割合が高くなっている。「そう思う」

だけの割合では、全体で男子 9.3 %、女子 7.6%と男女差はほとんど見られないが、小学生に限ってみると、男女とも「そう思う」の割合が 10%を越え(男子 15.1%、女子 10.0%)している。

では、子育てで、今悩んでいることがあるのか。7項目を設定し、3段階で評価してもらった。表2 - 2は、その結果を整理したものである。

表2 - 2 子育てで今悩んでいること×学年別

		悩んでいる	少し悩んでいる	悩んでいない	無回答
性の問題	小2	0.0%	6.0%	91.3%	2.8%
	小5	0.8%	11.8%	83.8%	3.6%
	中2	1.0%	11.0%	83.4%	4.6%
	全体	0.6%	9.7%	86.0%	3.7%
交友関係	小2	3.9%	30.3%	63.5%	2.3%
	小5	3.8%	26.7%	66.3%	3.2%
	中2	3.6%	22.4%	69.1%	4.9%
	全体	3.8%	26.4%	66.3%	3.5%
スポ少 クラブ 活動 部活動	小2	1.3%	13.0%	81.2%	4.5%
	小5	2.4%	16.9%	77.2%	3.5%
	中2	4.2%	20.6%	70.6%	4.6%
	全体	2.7%	16.9%	76.3%	4.2%
先生との 関係	小2	1.5%	7.3%	88.6%	2.6%
	小5	0.8%	10.3%	85.2%	3.6%
	中2	2.0%	12.6%	80.4%	5.0%
	全体	1.4%	10.1%	84.7%	3.8%
勉強	小2	11.4%	39.4%	47.3%	1.9%
	小5	10.7%	43.5%	43.0%	2.8%
	中2	23.2%	44.8%	27.7%	4.3%
	全体	15.1%	42.6%	39.3%	3.0%
進路	小2	1.9%	11.8%	84.0%	2.3%
	小5	5.8%	27.1%	63.9%	3.2%
	中2	21.1%	48.1%	26.0%	4.8%
	全体	9.6%	29.2%	57.7%	3.4%
教育費	小2	7.0%	24.3%	66.2%	2.5%
	小5	7.7%	28.9%	60.1%	3.4%
	中2	11.5%	35.8%	47.8%	4.9%
	全体	8.7%	29.7%	58.0%	3.6%

7項目のうち、3段階評価で「悩んでいる」の割合が全体で10%を越える項目は「勉強」

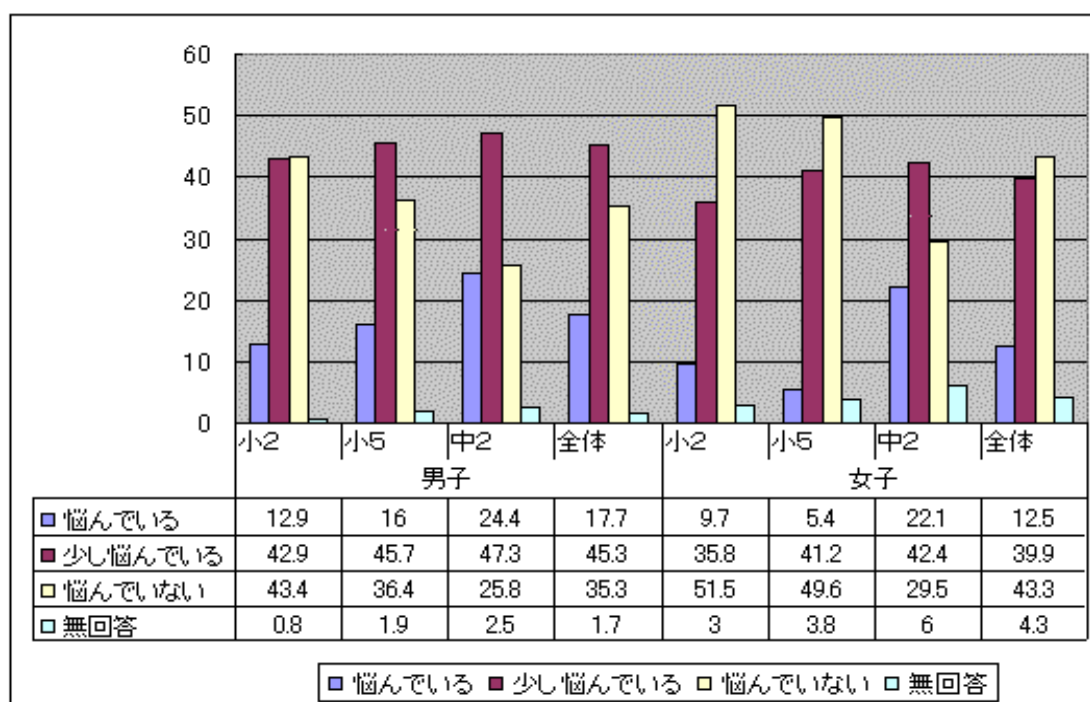
(15.1%)の1項目だけである。現時点で、特に大きな悩みを抱えている親は少ないと見てよい。しかし、悩みの問題を学年別に見ると、いくつかの項目で明確な違いが見られる。ここでは、「悩みあり」(「悩んでいる」+「少し悩んでいる」)の割合が30%を越える項目を中心にしてみることにする。まず、「交友関係」では、不思議なことに学年が低いほど割合が高くなっている。一般的に、思春期の子どもを持つ親は子どもの交友関係に悩みをもちがちであるが、小学生段階のそれはどう理解すべきか。ここには、いじめや不登校問題に対する予期不安が少なからず反映されていると考えることができる。

言うまでもなく、親の悩みが一番は子どもの「勉強」問題である。「悩みあり」の割合は全体で57.7%。中学2年生では68.0%(小学2年生50.8%、5年生54.2%)と高くなる。特に「悩んでいる」の割合は23.2%と小学生と比較して倍以上に達する。ここで注目したいのは、中学生は当然としても、小学生段階で子どもの勉強に「悩みあり」と回答する親が半数を超える点である。勉強の悩みは将来の進路問題と深くかかわってくるが、「進路」に「悩みあり」の割合は、中学2年生では69.2%(小学2年生13.7%、5年生32.9%)と高くなる。「勉強」以上に「進路」は、特別中学生問題と理解することができる。子どもの学力向上や進学問題を考えると当然、お金の問題が浮上してくる。「教育費」の面で「悩みあり」の割合は全体では38.4%。中学2年生では47.3%と小学生と比べると10~16ポイント高くなる。それでも3段階評価の「悩んでいる」の割合は予想したほど高くない。

子育てに関する悩み(7項目)を今度は性別でクロスしてみた。しかし、そこにはあまり違いが見られなかった。以下、「勉強」と性別の関係についてだけ見てみよう。

図表2-2 子育てで悩んでいること(勉強)×性別

(数字:%)



まず、全体で見ると、男子では「悩んでいる」17.7%、女子12.5%。男子の方が5ポイ

ント以上高い。「悩んでいる」と「少し悩んでいる」をプラスした「悩みあり」の数字で見ると、男子 63.0%、女子 52.4%と両者の間には 8 ポイント近くの開きが見られる。この表で特に注目したいのは、小学生段階の男女の差である。小学 2 年生の「悩みあり」の割合は、男子 55.8%、女子 45.5%で 10 ポイント以上の開きが見られる。小学生 5 年生では、男子 61.7 %、女子 46.6 %と 15 ポイント以上の差となる。総じて、親にとってのわが子の「勉強」の悩みは、学年を問わず、女子以上に男子の問題であると言ってよいであろう。

子育ての悩みの現実が以上見たとおりであるが、親はいったい子育ての悩みを誰と話し、相談しているのか。表 2 - 3 は、その結果を示す。

表 2 - 3 ふだんにおける子育ての相談相手×学年別

	夫又は妻	父	母	兄弟・姉妹	友人	先生	専門家	その他	特に話す人はいない	無回答
小 2	53.4%	0.9%	11.5%	3.2%	15.1%	0.1%	0.1%	0.7%	1.7%	13.1%
小 5	48.6%	1.1%	7.7%	2.8%	16.2%	0.3%	0.0%	0.1%	3.1%	20.1%
中 2	54.8%	0.7%	6.7%	3.5%	17.9%	0.0%	0.4%	0.4%	3.1%	12.4%
合計	52.2%	0.9%	8.6%	3.2%	16.4%	0.1%	0.2%	0.4%	2.7%	15.3%

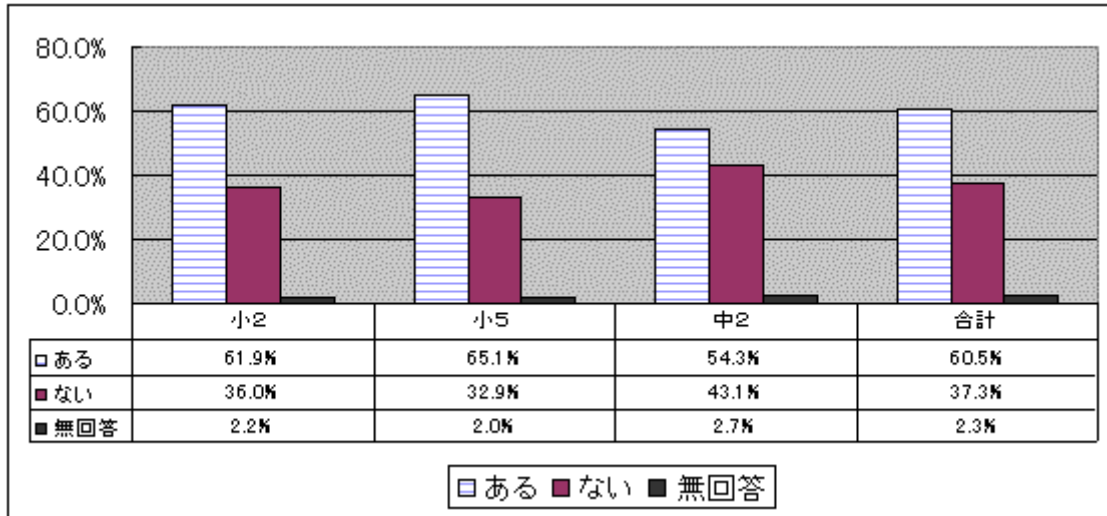
表から明らかなように、相談相手のトップ（全体）は「夫または妻」（回答者の 90% 近くが子どもの母親であることから、実際の相談相手は夫）で 52.2%。続いて「友人」（16.4%）、「母」（8.6%）の順である。「父」「先生」「専門家」を相談相手とする親はほとんどいない。「ふだんの相談相手」としたことが数字に反映したとも考えられる。また、「特に話す人はいない」が全体で 2.7% 存在している。割合の上では僅かであるが、無視できない数字である。なお、この設問は他の問と比較して、「無回答」の割合が全体で 15.3% と非常に高い。理由は定かでないが、上述したように、現時点で子どもの問題で特に大きな悩み等を抱えている親が少ないこともあり、相談相手の有無よりは、取り立てて他者に相談する内容がないという判断が作用したのかも知れない。

2 子育て観

まず、親のしつけとしての手伝いから見てみよう。家族との約束でする手伝いがあるか否かを尋ねた。図表 2 - 3 は、その結果を示す。

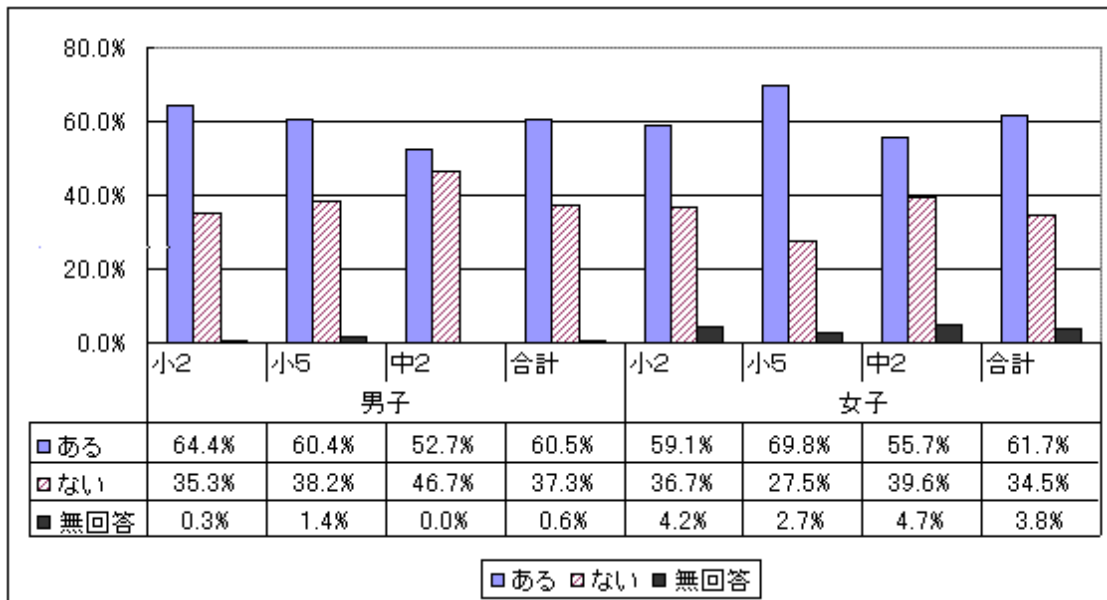
「ある」の割合は全体で 60.5%、「ない」は 37.3%。学年別に見ると、「ある」の割合が最も高いのは小学 5 年生で 65.1%、逆に最も低いのは中学 2 年生で 54.3%。両者の間には 10.8 ポイント以上の開きがある。

図表 2 - 3 家族との約束でする手伝いの有無 × 学年別



性別ではどうか。図表 2 - 4 に示すように、男女差はほとんど見られないが、全体で見ると、「ある」の割合は女子の方が若干高くなっている（男子 59.3 %、女子 61.7 %）。しかし、学年を越えて女子の方が「ある」の割合が高いとは言えない。小学 2 年生では「ある」の割合は男子の方が高いし、5 年生では逆に、女子の割合が男子より高くなっている。

図表 2 - 4 家族との約束でする手伝いの有無 × 性別



では、家族との約束でしている手伝いの中味は何か。家族との約束でしている手伝いが「ある」と回答した親（1298名）を対象に、「その他」を含む15項目を設定し、あてはまるもの全てに をしてもらった。表 2 - 5 - 1 は、その結果を整理したものである。

表2 - 5 - 1 家族との約束でしている手伝いの内容×学年別

(数字：%)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
小2	32.7	52.0	0.7	8.2	16.2	27.3	9.7	0.7	29.2	12.9	28.5	3.3	12.7	26.4	10.6
小5	32.4	45.4	3.5	20.2	22.9	30.3	8.9	2.7	46.4	21.2	22.3	2.9	9.9	29.7	7.8
中2	34.8	44.3	8.0	22.4	21.4	33.1	4.9	2.6	43.8	14.9	18.6	2.3	4.1	25.8	8.5
全体	33.2	47.2	3.9	16.9	20.3	29.6	7.9	1.9	40.0	16.6	23.2	2.9	8.0	27.4	8.9

- | | |
|------------|-------------|
| 1 食事の準備 | 9 風呂の掃除 |
| 2 食器の後始末 | 10 買い物・お使い |
| 3 洗濯 | 11 兄弟・姉妹の世話 |
| 4 洗濯物のとりこみ | 12 庭の掃除・草取り |
| 5 洗濯物をたたむ | 13 花の水やり |
| 6 部屋の掃除 | 14 ペットの世話 |
| 7 玄関の掃除 | 15 その他 |
| 8 トイレの掃除 | |

まず、全体から見てみよう。トップは、「食事の後始末」で 47.2%。続いて 2 位～ 5 位までは、「風呂の掃除」(40.0%)、「食事の準備」(33.2%)、「部屋の掃除」(29.6%)、「ペットの世話」(27.4%) の順である。

上位 5 位までを学年別で見るとどうなるか。小学 5 年生と中学 2 年生は順位は少し異なるが、全体の 5 位までの項目は同じである。小学 2 年生では、全体で 5 位に位置している「ペットの世話」が 6 位に落ち、「弟・妹の世話」が 4 位に入ってくる。小学 2 年生では「食器の後始末」と「食事の準備」の割合が予想に反して非常に高い。前者は 52.0% と 5 割を越え、学年別で最も高い。後者についても他の学年の割合と変わらない。食事を共にすることの意義を重視していることの現れであるとともに、約束として結果が見えやすく評価し易いことも作用しているのかも知れない。

次に、学年別に 10 ポイント以上の開きが見られる項目を拾ってみる。「風呂の掃除」では、小学 2 年生 29.2% に対して小学 5 年生は 46.4 % (中学 2 年生 43.8%) と 17 ポイント以上の差が見られる。全体の順位では高くないが、「洗濯物のとりいれ」では、小学 2 年生 8.2% に対して中学 2 年生は 22.4% と高く、14 ポイントを越える開きが見られる。もう一つ、「弟・妹の世話」の学年差を見ておこう。この項目は小学 2 年生の割合が最も高く 28.5%、逆に中学 2 年生のそれが最も低く 18.6% である。両者の間には 10 ポイント弱の差が見られる。「弟・妹の世話」が必要なのは、せいぜい小学校入学前までであることを考えれば頷ける。

上位の項目や学年差を中心にみてきたが、親との約束でやっている手伝いのうち、下位に位置づく項目は何か。最下位は「トイレの掃除」(全体) で 1.9%、続いて「庭の掃除・草取り」2.9 %、「洗濯をする」3.9% である。「トイレの掃除」は、小学生 (0.7%) には無理としても、中学生 (2.6%) にはもっと期待したい手伝い内容である。中学生の「洗濯をする」の割合も、予想に反して低かった。

以上、家族との約束でしている手伝いの内容を学年別に見てきたが、これを性別で見る

とどうなるか。表2 - 5 - 2は、手伝い内容を性別に整理したものである。

全体で見ると、男女とも、順位や割合は当然異なるが、トップ5位までに入る項目は同じである。男子を全体で見ると、トップは「食器の後始末」で47.5%、2位以下は「風呂の掃除」(43.9%)、「部屋の掃除」(28.1%)、「食事の準備」(27.0%)、「ペットの世話」(24.4%)の順である。女子の上位5位までは、「食器の後始末」(47.0%)をトップに、「食事の準備」(39.2%)、「風呂の掃除」(36.2%)、「部屋の掃除」(31.0%)、「ペットの世話」(30.4%)の順である。

表2 - 5 - 2 家族との約束でしている手伝い内容×性別

(数字：%)

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
男子	小2	24.8	53.3	0.9	7.0	12.6	23	7.8	0.9	35.7	10	31.7	2.6	10.4	26.1	11.3
	小5	29.7	46.5	2.7	17.7	16.8	32.7	8.8	0.4	50.4	23.5	20.8	2.7	6.2	24.8	8.4
	中2	26.6	41.3	5.4	14.1	12.5	28.8	2.2	1.1	46.2	13	17.4	2.7	3.3	21.8	11.4
	全体	27.0	47.5	2.8	12.8	14.1	28.1	6.6	0.8	43.9	16.1	23.8	2.7	6.9	24.4	10.3
女子	小2	42.1	50.3	0.5	9.7	20.5	32.3	11.8	0.5	21.5	13.3	24.6	4.1	15.4	26.7	9.7
	小5	34.8	44.4	4.3	22.4	28.2	28.2	8.9	4.2	43.9	19.3	23.6	3.1	13.1	34.0	7.3
	中2	42.2	47.1	10.3	29.9	29.3	33.3	7.4	3.9	21.5	16.7	19.6	2.0	4.9	29.4	5.9
	全体	39.2	47.0	5.0	21.0	26.3	31.0	9.3	3.0	42.9	17.2	22.7	3.0	11.2	30.4	7.6

- 1 食事の準備
- 2 食器の後始末
- 3 洗濯
- 4 洗濯物のとりこみ
- 5 洗濯物をたたむ
- 6 部屋の掃除
- 7 玄関の掃除
- 8 トイレの掃除

- 9 風呂の掃除
- 10 買い物・お使い
- 11 兄弟・姉妹の世話
- 12 庭の掃除・草取り
- 13 花の水やり
- 14 ペットの世話
- 15 その他

男女とも全体では、「食器の後始末」が第1位に位置しているが、女子では学年を問わずトップに位置している。さらに第2位は、男子では「風呂の掃除」(女子は3位)であるのに対して、女子では「食事の準備」(男子は4位)である。全体で見て、男女間に一定の差が見られる項目を挙げると、まず、「食事の準備」である。女子39.2%に対して男子は27.0%と12ポイント以上の差が見られる。また、全体の順位では上位5位までに入らないが、「洗濯物をたたむ」では女子26.3%に対して男子は14.1%、さらに「洗濯物のとりこみ」では前者21.0%に対して後者12.8%とそれぞれ10ポイント前後の開きが見られる。確かに、「食器の後始末」や「部屋・風呂の掃除」については、性による違いは少なく、性別を越えて共有される傾向が見られる。しかし、炊事・洗濯については、伝統的な性別役割が意識的か無意識的かはともかく、しつけとして女子に再生産されているきらいがある。

以上は、家族との約束でしている手伝いが「ある」と回答した者についての分析である。アンケートでは、「ない」と回答した者に対して、今後、約束してやらせた手伝いがあれば（上記15項目の中から）それを一つだけ挙げてもらった。「ない」と回答した親800人のうち、771人から回答があった。図表は省くが、以下、結果を要約的に紹介しておきたい。（なお、以下の数字は、15項目全体に占める割合で、合計100%となる。）

上位5位までを全体で見ると、トップは「部屋の掃除」で27.8%、続いて「食器の後始末」(13.4%)、「風呂の掃除」(12.1%)、「食事の準備」(8.6%)、「洗濯物をたたむ」(7.1%)であった。性別では、男子の場合、全体でトップは「部屋の掃除」(31.4%)、続いて「風呂の掃除」(13.8%)、「食事の後始末」(11.6%)、「ペットの世話」(7.9%)、「弟・妹の世話」(6.4%)の順であり、女子では、「部屋の掃除」(23.8%)、「食事の後始末」(15.3%)、「食事の準備」(11.7%)、「洗濯物をたたむ」(10.1%)、「洗濯物をとりこむ」(5.8%)で、男子と内容も割合もかなり異なる。学年差はあまり見られないが、男子で第1位の「部屋の掃除」については、小学2年生20.7%に対して中学2年生では41.3%と20ポイント以上の大きな開きが見られた。

次に、親は子育てでどのようなことに気をつけているのか。ここでは、気をつけている事柄を「その他」を含め11項目設定し、3つまで選んでもらった。表2-6-1は、その結果を示す。

表2-6-1 子育てで特に気をつけていること×学年別

(数字：%)

	人前で叱らない	感情的に叱らない	兄弟・姉妹と比べない	他人の子や兄弟・姉妹	よく話を聞く	笑顔で接する	一緒に過ごす時間をとる	逃さない	ちょっとした変化を見逃さない	子どもの健康と安全	食事の内容	子どもを信じる	その他
小2	3.3	21.1	10.8	49.9	9.8	26.2	28.7	52.3	13.5	22.6	2.6		
小5	3.6	19.1	9.9	48.2	10.2	30.5	32.6	47.8	14.2	26.3	3.1		
中2	7.6	11.3	9.7	42.9	8.0	22.1	35.9	45.0	16.5	30.3	2.5		
合計	4.8	17.1	10.1	47.0	9.3	26.3	32.5	48.3	14.8	26.5	2.7		

上位5位までをまず、全体で見してみよう。トップは「子どもの健康・安全」(48.3%)、続いて「よく話を聞く」(47.0%)、「ちょっとした変化を見逃さない」(32.5%)、「子どもを信じる」(26.5%)、「一緒に過ごす時間をとる」(26.3%)の順である。因みに、第6位は「他人の子や兄弟・姉妹と比べない」(25.9%)である。学年別に見ると、上位3位までは、小学5年生の1位と2位の逆転を除き、全体で見た順位と同じである。「子どもの健康・安全」と「よく話を聞く」の項目はいずれも、40%以上の高い割合を占めている。小学2年生では前者52.3%、後者49.9%と半数前後の親から選ばれていることになる。

全体で挙げた上位5項目を基準にすると、小学2年生では「子どもを信じる」の項目が、中学2年生では「一緒に過ごす時間をとる」がそれぞれ入っていない。しかし、第6

位までを取ると、順位の違いはあるが、全体でも学年別でも、同じ項目が挙がることになる。

ところで、順位とは関係しないが、小学生では「感情的に叩かない」の割合が意外と高い（2年生 21.2%、5年生 19.1%、中学2年生 11.3%）。と言うことは、日常的に子どもを叩いていることをある面で裏書きしている。親の反省を込めた姿勢の表明と理解することができるであろう。

続いて、表2-6-2は、子育てで特に気をつけている事柄を性別に整理したものである。全体で見ると、不思議なくらい男女間の割合の開きがないことが分かる。男女とも第1位から第3位までは同じ項目である。第1位は「健康と安全」、第2位は「よく話を聞く」である。前者については、女子の小学2年生は中学2年生よりも10.5ポイントも割合が高い。変質者による犯罪を受けやすい年齢であることも関係していると思われる。後者については、男子の小学2年生と中学2年生の間に10.3ポイントの開きがある。小学2年段階では女子に比べ男子はまだ幼く、親の配慮によるものと考えられる。第3位は「ちょっと

表2-6-2 特に気をつけている事柄×性別

(数字：%)

		人前で叱らない	感情的に叩かない	他人の子や兄弟・姉妹と比べない	よく話を聞く	笑顔で接する	一緒に過ごす時間をとる	ちょっとした変化を見逃さない	子どもの健康と安全	食事の内容	子どもを信じる	その他
男子	小2	2.5	21.0	29.7	51.8	8.7	26.1	30.8	49.9	12.0	22.4	2.8
	小5	2.9	21.1	23.3	48.1	9.6	31.3	32.1	50.0	14.2	27.0	2.9
	中2	7.7	12.0	24.6	41.5	8.9	19.5	34.1	45.9	19.2	34.4	2.1
	全体	4.4	18.1	25.8	47.2	9.1	25.7	32.3	48.6	15.1	27.9	2.6
女子	小2	4.2	21.2	25.8	47.9	10.9	26.4	26.4	54.8	15.2	22.7	2.4
	小5	6.7	17.0	28.6	48.2	10.8	29.6	33.2	45.6	14.3	25.6	3.3
	中2	7.4	10.7	23.2	44.3	7.1	24.6	37.7	44.3	13.9	26.5	3.0
	全体	6.2	16.1	25.9	46.8	9.6	26.9	32.6	48.0	14.4	25.0	2.9

した変化を見逃さない」である。男女を問わず学年が上がるに従い割合が高くなっている。最高は中学2年生の女子で37.7%に達する。思春期に入った女子の心と身体の変化に対する親の気遣いからくるものであろう。第4位は男女で項目が異なる。男子は「子どもを信じる」、女子は「一緒に過ごす時間をとる」である。前者については、中学2年生の割合が34.4%と高く、小学2年生のそれと比べ12ポイントの開きがある。回答者のほとんどは母親であり、この年齢の男子の行動や態度を理解しきれない部分があり、とにかく子どもを信じたいという思いが反映されたものと解釈できる。

次は視点を変えて、親は子どもにどのような態度や力を身に付けさせたいと望んでいる

のか。家庭教育の目標とも言えるものである。この点を明らかにするため、「その他」を含む14項目から3つまで選んでもらった。表2-7-1はその結果を示す。

上位5位までをまず全体で見ると、トップは「思いやり」で58.2%、第2位は「他人に迷惑をかけない」で42.6%、3位以下は、「困難を乗り越える力」(34.8%)、「自分の意見がはっきり言える」(31.9%)、「物を大切にする」(26.5%)の順である。「思いやり」「他人に迷惑をかけない」は、「他者への配慮」という伝統的に日本人が大切にしてきた価値項目である。最近では、自分さえよければという、自己中心的な子どもが増えていることへの警戒心も反映してか、多くの親がこの価値を重視し、子どもに伝え身に付けさせたいと考えている。3位の「困難を乗り越える力」も、伝統的に日本人の精神性の基礎となった「努力価値」である(忍耐)。4位に位置する「自分の意見がはっきり言える」は、わが子への新しい期待項目と言ってよい。自分の考えを持つこと、そしてそれを他者に分かるように話せる能力は、「生きる力」を育てる今日の教育の重要な課題であるとともに、自己をアピールし、自己を防衛する上からも欠かせない力である。このことを意識した選択であると思われる。

表2-7-1 子どもにぜひ、身に付けさせたい力と態度×学年別

	物を大切に する	礼儀正しさ	落ち着き	正義感	協調性	思いやり	困難を乗り 越える力
小2	34.5%	19.9%	8.6%	4.8%	11.5%	61.0%	29.8%
小5	16.2%	19.3%	5.2%	3.6%	13.8%	57.9%	37.0%
中2	16.6%	17.5%	7.2%	4.3%	11.5%	55.9%	37.3%
合計	26.5%	18.9%	6.0%	4.2%	12.3%	58.2%	34.8%
	責任感	リーダーシ ップ	時間や決ま りを守る	人の意見を 聞く	自分の意見 がはっきり 言える	他人に迷惑 をかけない	その他
小2	15.0%	0.9%	17.6%	7.6%	33.5%	41.9%	0.7%
小5	21.3%	2.3%	17.3%	7.4%	30.5%	42.0%	0.4%
中2	23.5%	2.4%	17.5%	5.3%	31.9%	43.9%	2.0%
合計	20.0%	1.9%	16.6%	6.8%	31.9%	42.6%	1.0%

学年別(発達段階別)に見るとどうか。上位2位までは全体と順位と変わらないが、3位以降は、小学2年生と5年生を境に違いが見られる。「物を大切にする」では、前者34.5%に対して、後者は16.2%(因みに中学2年生は16.6%)と半減している。小学2年生では5位までに上がらないが、小学5年生と中学2年生では「責任感」が5位に入っている。小学2年生(15.0%)と5年生(21.3%)の間に既に6.3ポイントの開きが見られる。

次に、下位の選択項目について見てみたい。「その他」を除くと、全体で、「リーダーシ

ップ」(1.9%)と「正義感」(4.2%)が最下位グループを形成している。いずれも子どもに身に付けさせにくい項目であることが作用したのかも知れない。全体を通して言えることは、たとえ人の上に立たなくても、また特に目立たなくてもよい、大切なのは社会的な常識を身に付け、ふつうに生きて行って欲しい、こういう親の願いが読みとれる。

以上、学年別で見てきたが、今度は、子どもに身に付けさせたい態度や力を性別に分析してみたい。表2-7-2から分かるように、全体で上位5位までは、男女とも学年別の全体の順位と変わりはない。しかも、男女の割合の開きも思ったより少ない。強いて言えば、第1位の「思いやり」の割合の男女差ぐらいである。男子55.0%、女子61.5%で、後者が6.5ポイント上回っている。しかし、男女の違いを学年でクロスさせると、いくつかの特徴を指摘することができる。

まず、「思いやり」については、小学2年生の男子(55.2%)と女子(67.3%)の間に12.1ポイントの開きが見られる。「思いやり」の心や態度は現実には男子よりも女子に強く求められる傾向があり、小さいときから身に付けさせておきたいという親の思いが、この数字

表2-7-2 子どもにぜひ、身に付けさせたい力と態度×性別

		物を大切にする	礼儀正しさ	落ち着き	正義感	協調性	思いやり	困難を乗り越える力
男子	小2	34.5%	19.3%	11.8%	5.9%	11.2%	55.2%	32.5%
	小5	26.5%	20.6%	7.2%	4.3%	15.5%	55.9%	36.9%
	中2	20.0%	15.5%	4.3%	5.2%	10.3%	53.9%	33.5%
	全体	27.0%	18.5%	7.8%	6.8%	12.4%	55.0%	34.4%
女子	小2	34.5%	20.6%	5.2%	3.6%	11.8%	67.3%	27.0%
	小5	30.5%	18.1%	3.2%	3.0%	12.1%	59.8%	37.2%
	中2	13.4%	19.4%	4.1%	3.6%	12.6%	57.9%	41.0%
	全体	23.7%	19.3%	4.1%	3.4%	12.2%	61.5%	35.3%
		責任感	リーダーシップ	時間や決まりを守る	人の意見を聞く	自分の意見がはっきり言える	他人に迷惑をかけない	その他
男子	小2	17.6%	0.8%	16.2%	9.0%	31.9%	42.0%	0.8%
	小5	22.9%	3.2%	17.1%	8.3%	30.5%	42.8%	0.5%
	中2	24.1%	3.2%	17.8%	7.2%	36.4%	46.1%	2.0%
	全体	21.5%	2.4%	17.0%	8.1%	32.9%	43.6%	1.1%
女子	小2	12.1%	0.9%	19.1%	6.1%	35.2%	41.8%	0.6%
	小5	19.9%	1.3%	17.5%	6.5%	30.5%	41.2%	0.5%
	中2	23.0%	1.6%	17.2%	3.6%	27.6%	41.8%	1.9%
	全体	18.6%	1.3%	17.9%	5.3%	30.9%	41.6%	0.9%

に現れている。男女とも3位に位置する「困難を乗り越える力」については、男女の割合差は全体でわずか0.9(男子34.4%、女子35.3%)ポイントに過ぎない。ところが、中学2年生の男女の割合を比較すると、女子(41.0%)が男子(33.5%)を7.5ポイントも上回っている。予想外の結果である。困難を乗り越えるには努力や忍耐が不可欠にある。伝統的な基準に従えば、男子に、より期待される力であると想定されるが、親にとっては、この種の力は男子よりも女子により必要であると理解している。興味深いことに、男女とも4位の「自分の意見がはっきり言える」については、全体では男子(32.9%)が女子(30.9%)を2.0ポイント上回るに過ぎないが、中学2年の男女で見ると、男子(36.4%)が女子(27.6%)を8.8ポイントも上回っている。思春期に達した男子には人を納得させる表現力を、女子には謙虚さを、という判断によるものなのか、この点は明らかでない。ただ、回答者の圧倒的多数が母親であり、自らの体験と重ね合わせた判断が、ここには少なからず反映されていると解釈できる。

最後にもう一つ、男女とも全体で5位に位置する「物を大切に使う」についての性差に着目しておきたい。この項目については、全体で男子27.0%、女子23.7%と3.3ポイント男子の割合が高いが、性差よりも発達段階差の方が大きい。学年が進につれて男女とも割合が大きく減少している。小学生の低学年段階の主要なしつけ項目と理解することができる。男子では、小学2年生と中学2年生の間に14.5ポイントの差が、女子では21.1ポイントの差が見られる。思春期の女子では問題とすべき項目ではない、と言うよりは既に身に付いているという理解に基づくものであろう。

子どもの健やかな成長を望まない親はいない。子どもへの期待が大きく、要求が多くなればなるほど親は悩まざるを得ない。子どもは親が望むようには行動しないからである。このため多くの親は、あれやこれやの方法・手立てを駆使しながら、子どもと毎日格闘していると言っても言い過ぎではないであろう。では親は、子どもが毎日生活する家庭をどのような場と認識しているのか。家庭の役割という観点から親の意識を見てみよう。

表2 - 8 家庭の役割×学年別

	基礎的な学力を身につける	人と関わる力を身につける	多様な生活体験をさせる	心の安らぎの場になる	豊かな人間性を育てる	美しい立ち居ふるまいを身につける	正しい言葉遣いを身につける	社会生活のルールやマナーを身につける
小2	13.7%	41.8%	23.1%	45.4%	26.8%	14.7%	20.8%	64.6%
小5	13.7%	42.3%	24.2%	45.4%	28.9%	12.8%	19.6%	64.4%
中2	12.3%	39.9%	14.4%	45.5%	28.8%	10.5%	17.8%	66.3%
全体	13.2%	41.3%	20.6%	45.4%	28.2%	12.6%	19.4%	65.1%

表2 - 8は、基本的な生活習慣を身につける以外で、「あなたが特に大切にしている家庭の役割は何ですか」という質問に対する回答(3つまで選択可)を整理したものである。(なお、表には「その他」0.6%を除いている。)

多くの類似のアンケートで「基本的な生活習慣を身につける」が常にトップの座を占めている。表2 - 8は、この項目を除いて尋ねた結果である。全体で第1位に上がったのは、他を大きく引き離し、「社会生活のルールやマナーを身につける」(65.1%)である。続いて「心の安らぎの場となる」(45.4%)、「人と関わる力を身につける」(41.3%)の順となっている。上位3位と割合の上ではかなり下回るが4位に位置する「豊かな人間性を育てる」(28.2%)までが、子どもの教育という観点から親が重視している家庭の役割であると理解することができる。ところで、「基礎的な学力を身につける」が全体で13%強ある。8項目の中で7位に位置している。この割合が高いのかどうかは判断しかねるが、最近における子どもの学力低下問題も少なからず作用しているものと思われる。

学年別に見ても大きな違いはないが、「多様な生活体験をさせる」の項目では中学2年生の割合の低さが目につく。しかし、自然体験や社会体験などは基本的には小学生段階の子どもにふさわしい項目であろう。この点を考慮すべうなずける。

第3章 子どもの学校生活の様子と学校・教師への要望等

親にとって、家庭での子どもの活動は目に見えるものであり、かなり詳しく観察している。では、子どもの学校の様子や学校教育問題をどの程度関心をもち、理解しているのか。この点からアンケート結果を見てみよう。

1 子どもの学校での生活の様子

表3-1-1は、子どもの学校の様子をどのくらい知っているか、5項目を設定し、子どもがそれを好きであるか嫌いであるかを、4段階評価で尋ねた結果である。

表3-1-1 子どもの学校での様子×学年別

(数字：%)

		とても好き	まあまあ好き	あまり好きではない	好きではない	無回答
学校に行くこと	小2	58.7	33.8	4.8	0.7	2.0
	小5	52.9	40.3	4.2	0.7	2.0
	中2	41.0	49.1	5.7	0.7	3.5
	全体	50.8	41.1	4.9	0.7	2.5
学校での勉強	小2	21.3	53.9	20.1	2.3	2.5
	小5	16.5	54.6	24.3	2.6	2.0
	中2	8.7	48.5	34.0	5.2	3.6
	全体	15.4	52.4	24.8	3.4	2.7
学校の行事	小2	59.2	34.1	36.1	0.3	2.9
	小5	49.0	45.2	3.6	0.1	2.0
	中2	30.2	56.1	9.1	1.1	3.5
	全体	46.0	45.3	5.4	0.5	2.8
スポーツ少年団 クラブ活動 部活動	小2	28.2	27.1	9.6	3.2	31.9
	小5	62.0	31.0	3.4	0.7	3.0
	中2	51.3	35.9	6.7	2.2	3.8
	全体	47.6	31.4	6.5	2.0	12.5
友達と遊ぶこと	小2	87.5	9.0	0.9	0.0	2.6
	小5	85.5	11.7	1.1	0.1	1.6
	中2	76.5	18.7	1.4	0.3	3.1
	全体	83.1	13.2	1.1	0.1	2.4

まず、「学校に行くこと」についてはどうか。「好き」「とても好き」と「まあまあ好き」をプラス(以下同様)は全体で91.9%と高く、学年別に見ても、いずれも90%を越えてい

る。「とても好き」に限って見ると、小学2年生は58.7%と半数を超えるが、中学2年生では41.0%と低くなる。全体的に子どもは向学指向であると考えてよい。しかし、「学校での勉強」となると、様相が異なってくる。学校の勉強が「好き」の割合は全体では67.8%と決して低くはないが、学年差が大きい。例えば、小学2年生75.2%に対して中学2年生は57.2%と両者の間に18ポイントの開きが見られる。ところで、学校の勉強が「好き」については、「とても好き」よりも「まあまあ好き」の割合の方が著しく高い。「とても好き」の割合で見ると、全体で15.4%と低く、最も高い小学2年生で21.3%に過ぎない。中学2年生では、8.7%と10%を割っている。「学校好きの勉強嫌い」の傾向は学年が進むにつれて顕著になっている。

「学校での行事」はいわゆる勉強と異なる。このこともあり、ほとんどの親は、わが子は学校での行事が「好き」(91.3%)だと回答している。ただ、ここでも「とても好き」だけで見ると、小学2年生の59.2%に対して中学2年生は30.2%に止まり、両者の間に29ポイントの差がある。思春期に入ると、学校での勉強だけでなく、学校行事にも積極性や意欲が減退してくるのが気になる。「クラブ活動・部活」は「学校での行事」と異なるとともに、子どもの興味・関心に基づき選択・参加する活動である。それだけに「好き」の割合の高さが期待される。ところで、小学2年生ではスポーツ少年団には地域によって入団できないところもあり、クラブ活動にも学校によって参加できないところもある。また、部活は中学生からということもあり、無回答の割合(31.9%)が高くなっている。小学2年生を除き、5年生及び中学2年生の割合を見ると、「好き」が前者93.0%、後者は87.2%と高い。中学2年生では「とても好き」の割合が51.3%と半数を超えている。「勉強嫌いの部活好き」の中学生像が浮かび上がってくる。最後の「友だちと遊ぶ」はどうか。言うまでもなく子どもにとっては一番楽しいことである。事実、親のほとんどがこのことを承知しており、「とても好き」(全体で83.1%)と答えている。

表3 - 1 - 2 子どもの学校の様子×性別

(数字：%)

		学校に行くこと		学校での勉強		学校での行事		クラブ活動・部活動		友達と遊ぶこと	
		好き	嫌い	好き	嫌い	好き	嫌い	好き	嫌い	好き	嫌い
男子	小2	92.4	6.7	70.3	28.0	92.7	4.8	54.3	15.7	97.2	1.1
	小5	94.7	4.5	69.5	29.7	95.2	4.0	95.2	3.7	98.1	1.6
	中2	93.1	6.3	56.7	42.7	87.1	12.4	90.0	8.9	97.7	1.7
	全体	93.4	5.8	65.6	33.3	91.7	6.9	80.0	9.4	97.7	1.5
女子	小2	92.4	4.2	80.3	16.4	93.9	2.7	56.4	9.7	95.8	0.6
	小5	91.6	5.1	72.8	24.0	93.3	3.5	90.8	4.3	96.2	0.8
	中2	87.2	6.6	57.7	35.8	85.5	8.2	84.7	9.0	92.9	1.6
	全体	90.3	5.3	69.9	25.7	90.8	4.9	78.1	7.6	95.9	1.0

以上、学校での子どもの様子を学年別に尋ねたが、性別に違いが見られるのか。表3 - 1 - 2は、4段階評価を「好き」「とても好き」「まあまあ好き」を加算）と「嫌い」「あまり好きでない」「好きではない」を加算）に分けて整理したものである。

「好き」「嫌い」を全体で見ると、男女間に大きな割合の開きは見られないが、「学校での勉強」を除くと、他の4項目については男子の方が女子よりも若干割合が高くなっている。しかし、各項目を学年間で比較すると、男女差が少なからず見られる。「学校での勉強」について、「好き」の割合を小学2年生の男女で比較すると、そこには10ポイント（男子70.3%、女子80.3%）の開きが見られる。また、「学校での勉強」の「好き」の割合は学年が進むにつれて大きく低下しているのが分かる。

表には数字は示していないが、5項目を「とても好き」の割合で見るとどうなるか。女子は男子よりも全体で「学校に行くこと」（女子52.6%、男子49.0%）、「学校での勉強」（16.7%、14.2%）、「学校での行事」（49.2%、42.9%）について、それぞれ数ポイント上回っている。逆に、「クラブ活動・部活」（男子50.7%、女子44.5%）と「友だちと遊ぶ」（85.0%、81.3%）については、男子の方が女子のそれを数ポイント上回っている。

「とても好き」の割合を学年と性別でクロスすると、中学2年生に大きな特徴が見られる。「学校に行くこと」では、男子37.2%に対して女子は44.5%で7.3ポイントの差が、「学校の勉強」では、それぞれ7.4%、9.8%で2.4ポイントの差が、「学校での行事」はそれぞれ23.8%、36.3%で12.5ポイント差が見られる。ところが、「クラブ活動・部活」では、「とても好き」の割合は男子57.3%に対して女子は45.6%。ここには11.7ポイントの開きが見られる。また、「友だちと遊ぶ」についても男子80.5%、女子72.7%と前者の割合が7.8ポイント高い。総じて、中学生について言えば、決められた（与えられた）ことについては女子の方が、自由度の高い活動については男子の方がそれぞれ意欲的にかかわる傾向が見られる。

親の多くはわが子の勉強の好き嫌いはもちろん、行事その他子どもの行動をかなりよく知っている。子どもが自発的に話すのか、親が聞き出しているのか、この点は定かでないが、学校での出来事や様子が親子の会話の中でよく出てきていることが裏付けられる。このこともあり、親は子どもの担任の教師の名前はもちろん、子どもの親しい友だちの名前もよく知っている。担任の先生の名前を知っているかという問いに、全体で96.4%、最も少ない中学生の親でも94.7%が「知っている」と回答している。子どもの親しい友人の名前については、「知っている」の割合は若干下がるが、それでも全体で93.1%。中学生の親では、「知っている」割合は91.5%（因みに小学2年生の親93.7%、5年生の親94.1%）であった。それでも担任の先生の名前や友人の名前を「知らない」保護者も少なからず存在する。その多くはおそらく、母親以外の回答者ではないかと想われる。

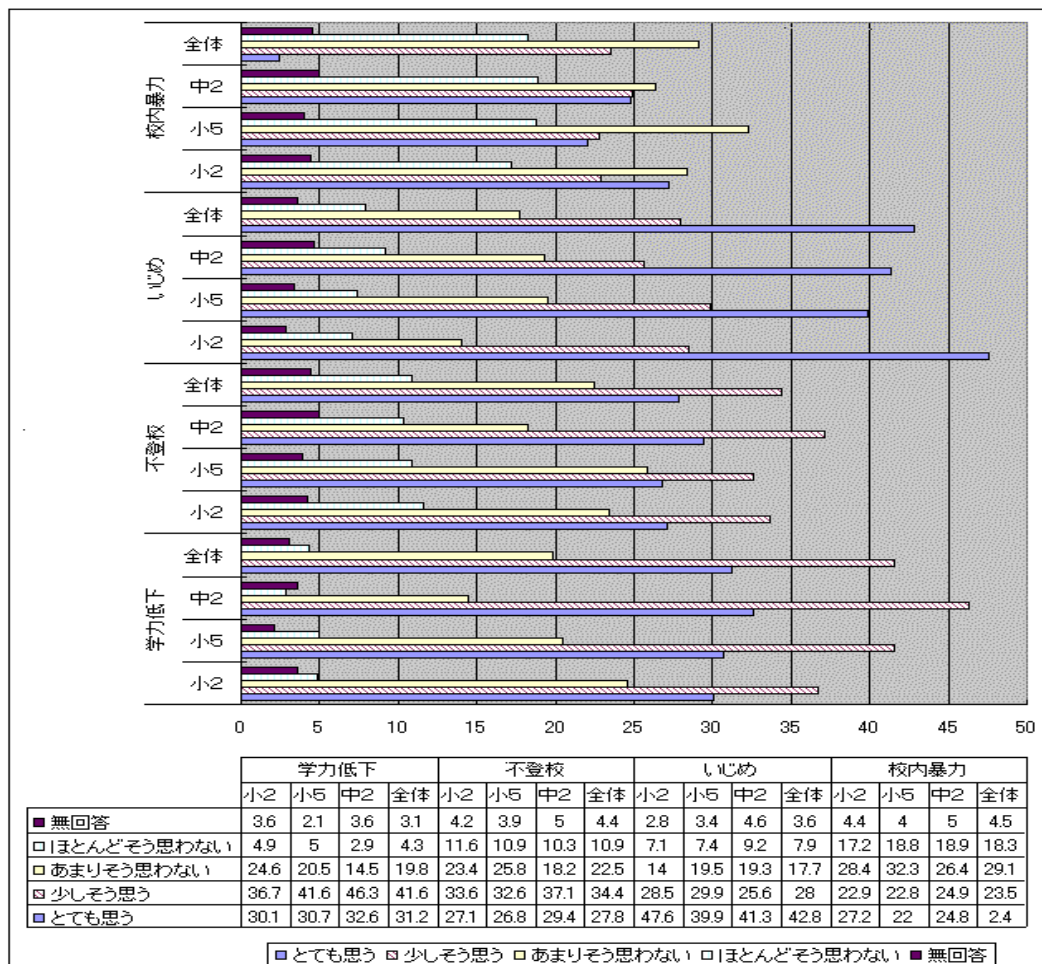
2 親の学校問題理解と学校・教師への要望等

学校教育場面での子どもの様子についての理解度、認知度は以上見てきたとおりであるが、今度は直接わが子の問題と離れて、今日の学校教育の中で特に問題と思う事は何かについて尋ねた（4項目、それぞれ4段階評価）。表3-1は、その結果を示す。

4段階評価のうち、「とてもそう思う」と「少しそう思う」をプラスした「思う」（以下同様）の割合（全体）で見ると、4項目の中で「学力低下」が72.8%で最も高く、続いて「いじめ」70.8%、「不登校」62.2%の順で、最下位の「校内暴力」に関しては48.1%と5割を割っている。学年別ではどうか。「学力低下」では、中学2年生の親（78.9%）と小学2年生の親（66.8%）の間に12.1ポイントの開きが見られる。また、「いじめ」については、逆に、前者66.9%に対して後者76.1%で、両者の間に10ポイント近くの差

図表3-1 今日の学校教育の問題点×学年別

（数字：％）



が見られる。「学力低下」は中学生の親に、「いじめ」は小学生の親にそれぞれ、相対的により深刻な問題として理解されている。特に「いじめ」については、小学2年生の親の「とてもそう思う」の割合が47.6%と5割に近い。実際に自分の子どもがいじめを受けた体験

からと言うよりは、子どもや他者やマスコミなどの情報に基づき、これから学校生活を長期に渡り続けることになるわが子の安全確保という面から、一種の予期不安がこの数字に反映されているものと解釈できる。「校内暴力」についても、小学2年生の親の「とてもそう思う」の割合が一番高い(27.2%)のも同様に考えることができよう。

上述の4項目は学校教育が抱える問題のごく一部に過ぎない。学校や教師批判の続く今日、親は学校・教師に特に何を望んでいるのか。「その他」を含む9項目を設定し、3つまで選んでもらった。その結果を学年別に整理したのが、表3-2である。

表3-2 学校の先生に特に望むこと×学年別

(数字:%)

	子どもに合ったほめ方・叱り方	親との関わり方	子どもとの接し方	各教科の指導力	総合的な学習の進め方の工夫	P T A 活動への参加	学校・学級情報の提供	先生同士の磨き合い	その他
小2	61.1	13.2	58.2	27.2	16.6	2.0	24.2	9.3	2.9
小5	64.4	10.7	58.1	32.9	19.2	1.6	24.7	9.9	3.0
中2	53.4	10.1	55.8	45.6	14.3	0.4	21.7	12.6	3.8
全体	59.7	11.3	57.4	35.3	16.7	1.4	23.5	10.6	3.2

まず、全体で見ると、「子どもに合ったほめ方、叱り方」がトップで59.7%、第2位が「子どもとの接し方」で57.4%。両者は第3位の「各教科の指導力」の割合(35.3%)を20ポイント以上も引き離している。親の教師への希望は、子どもの学力向上と直結する「各教科の指導力」の向上以上に、ほめ方や叱り方、また子どもへの接し方という子どもを動機付ける能力や教師の人間関係力を重視していることが分かる。と言うことは、これらの能力や技術が十分でないという現場教師に対する批判にもなっている。

しかし、学年別に数字を見ると、いくつかの特徴が見られる。「子どもに合ったほめ方・叱り方」は中学生(53.4%)よりも小学生(2年生61.1%、5年生64.4%)の親に希望が強い。一方、「各教科の指導力」については、小学生(2年生27.2%、5年生32.9%)よりも中学生(45.6%)の親に希望が強いことが分かる。親の関心は上記3項目に集中し、教師の「P T Aへの参加」(全体1.4%)は言うまでもなく、「先生同士の磨き合い」(10.6%)、「親とのかかわり方」(11.3%)の割合が極端に低くなっている。なお、このような中、「学校・学級情報の提供」については、学年を問わず20%以上の親の期待があることに注目しておきたい。

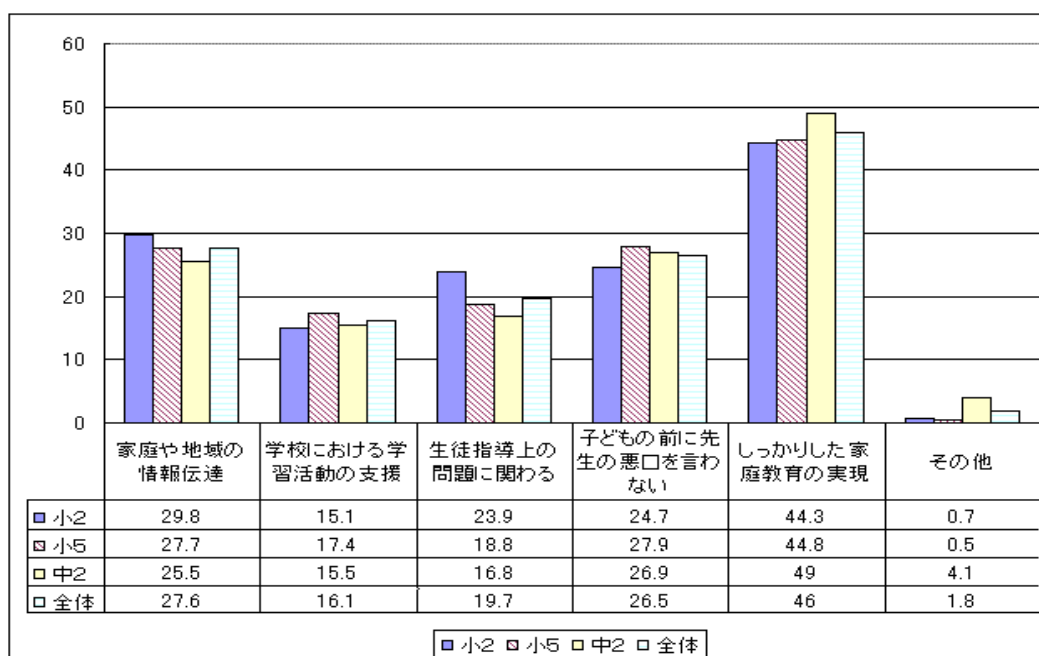
学校・教師への要望は以上のとおりである。言うまでもなく、親は、学校・教師に要求するだけでなく、学校・教師への支援を惜しんではならない。親自身、学校にどのような協力が必要と考えているのか。「その他」を含む6項目から2つまで選択してもらった。そ

の結果を整理したのが、図表3 - 2である。

全体で見ると、選択肢が多少誘導的であったことが作用したのか、「遠回りのようだが、しっかりした家庭教育（しつけ）を実践する」がトップで46.0%。家庭教育の質的向上は学校の教育力に有形・無形に作用するだけにきわめて重要なではあるが、実際には言うは易し、行なうは難しである。第2位に「家庭や地域の情報伝達」(27.6%)、3位に「子どもの前で先生の悪口を言わない」(26.5%)が挙がっている。前者は学校と家庭と地域の連携教育を考える上で不可欠であるし、後者は教師にとっての最低の権威の保持と、子どもと教師間の信頼関係樹立に欠かせない要因である。この次元の協力は、親の一寸した心がけと努力で可能になるものであり、間接的に学校の活性化に貢献する。

図表3 - 2 親として学校にどのような協力が必要か×学年別

(数字：%)



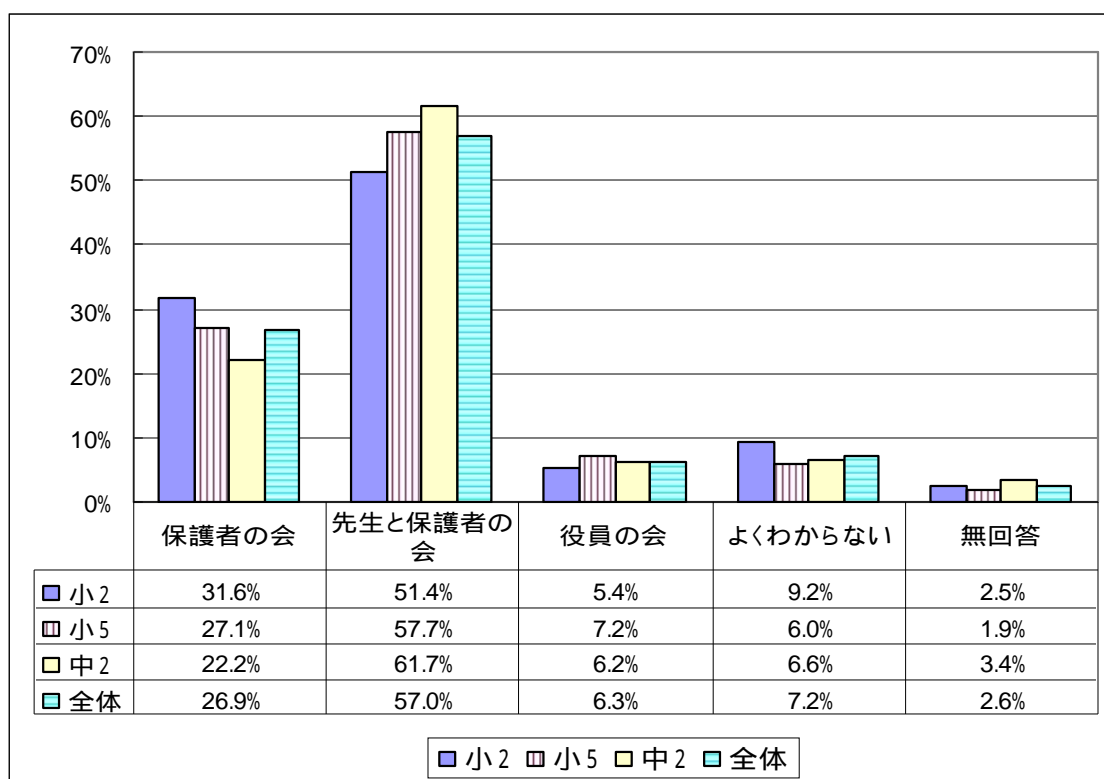
実は、これからの学校教育を考えると、「生徒指導上の問題に関わる」(全体 19.7%)と「学校における学習活動の支援」(16.1%)がとりわけ重視されてくる。地域にはもちろん、家庭の中にも優れた専門的な能力や体験をもつ大人が多数存在する。これらの能力や技術や体験を学校教育の中に如何に取り込むか、単なる間接的な応援や支援ではなく、当面する、また新たに出てくる学校の教育問題に教師の援助者として、教師のパートナーとして、また教師のアドバイザーとして直接かかわることのできる大人をどの位確保できるか。この点が、これからの学校評価を考える上できわめて重要な要素となる。「生徒指導上の問題に関わる」と「学校における学習活動の支援」の割合を高いと見るか、低いと見るかは意見の分かれるところであるが、一定数の親がこの価値の重要性を認識し、共有している点を高く評価したい。

第4章 PTA活動に対する意義とかかわり方

1 親にとってPTAとは何か

子どもを持つ親は誰でも、学校教育の現実を批判するとともに、学校の在り方についても何らかの考えを持っている。しかし、これらが公的に表明される機会は少なく、結果的に、学校教育批判は内部に潜行し、後を引くことになる。しかし、周知のように、学校における教育・子どもの問題の在り方を考え、問題解決する重要な組織としてPTAが存在している。この組織がどのように機能しているのか。まず、親はPTAをどのような組織として捉えているのか。この点を明らかにしたのが、図表4-1である。

図表4-1 PTAはどのような会か×学年別



PTAは「先生と保護者の会」が正しい回答であるが、結果が示すように、正解は全体で57.0%にすぎない。誤答の中で「保護者の会」が26.9%と最も多い。「よくわからない」を含め40%以上の親は、PTAという言葉の意味が理解できていない。学年別に見ると、一つの特徴が見られる。正解の割合は学年が進につれて高くなる。中学2年生の親が一番

高く 61.7 %、小学 2 年生の親が最も低く 51.4%で、両者の間に 10 ポイントを越える開きがある。また、誤答である「保護者の会」を見ると、当然ながら逆の結果(中学 2 年生 22.2%、小学 2 年生 31.6%、両者に 9.4 のポイント差) が出ている。ここでは、学年差の意味を解釈するよりも、子どもの入学段階での説明不足 (理解不足) が問題とされねばならない。

P T A の理解不足や誤解があるとしても、現実には子どもの親として P T A と何らかのかかわりを体験している。親は P T A 活動の意味や意義をどのように感じているのか。表 4 - 2 から、その一面を見てみよう。

表 4 - 2 P T A 活動の意味・意義について × 学年別

(数字 : %)

	うれしい 出会いがあつて	先生とコミュニケー ションが図れる	講習会や研修が あつて勉強になる	活動がわずらわしい	参加したい活動が ない	日程があわない	子どもの学習環境 の整備のため必要	わが子以外の子ども がよく分かる	感じない 意義・意味を	その他
小 2	22.3	27.8	12.5	20.8	5.4	23.3	26.6	15.7	9.9	2.2
小 5	29.9	30.5	13.7	20.9	6.7	24.3	23.8	20.0	9.9	3.6
中 2	29.1	29.7	16.2	20.6	7.8	26.3	22.4	16.8	7.8	2.1
全体	27.3	29.3	14.2	20.8	6.7	24.6	24.2	17.6	9.2	2.7

まず、全体で見ると、第 1 位の選択は「先生とのコミュニケーションが図れる」で 29.3 %、2 位は「出会いがあつてうれしい」の 27.3%。総じてプラス評価が上位を占めているが、「日程があわない」(24.6%) は置くとして、「活動がわずらわしい」というマイナス評価が 20.8% と高い。割合の上では大きくないが「意義・意味を感じない」も 9.2% と 10 人に 1 人近くがそう感じている。各単位における P T A 活動の現実を反映したものと理解できる。各項目の割合については、学年別に見てもほとんど変わらない。

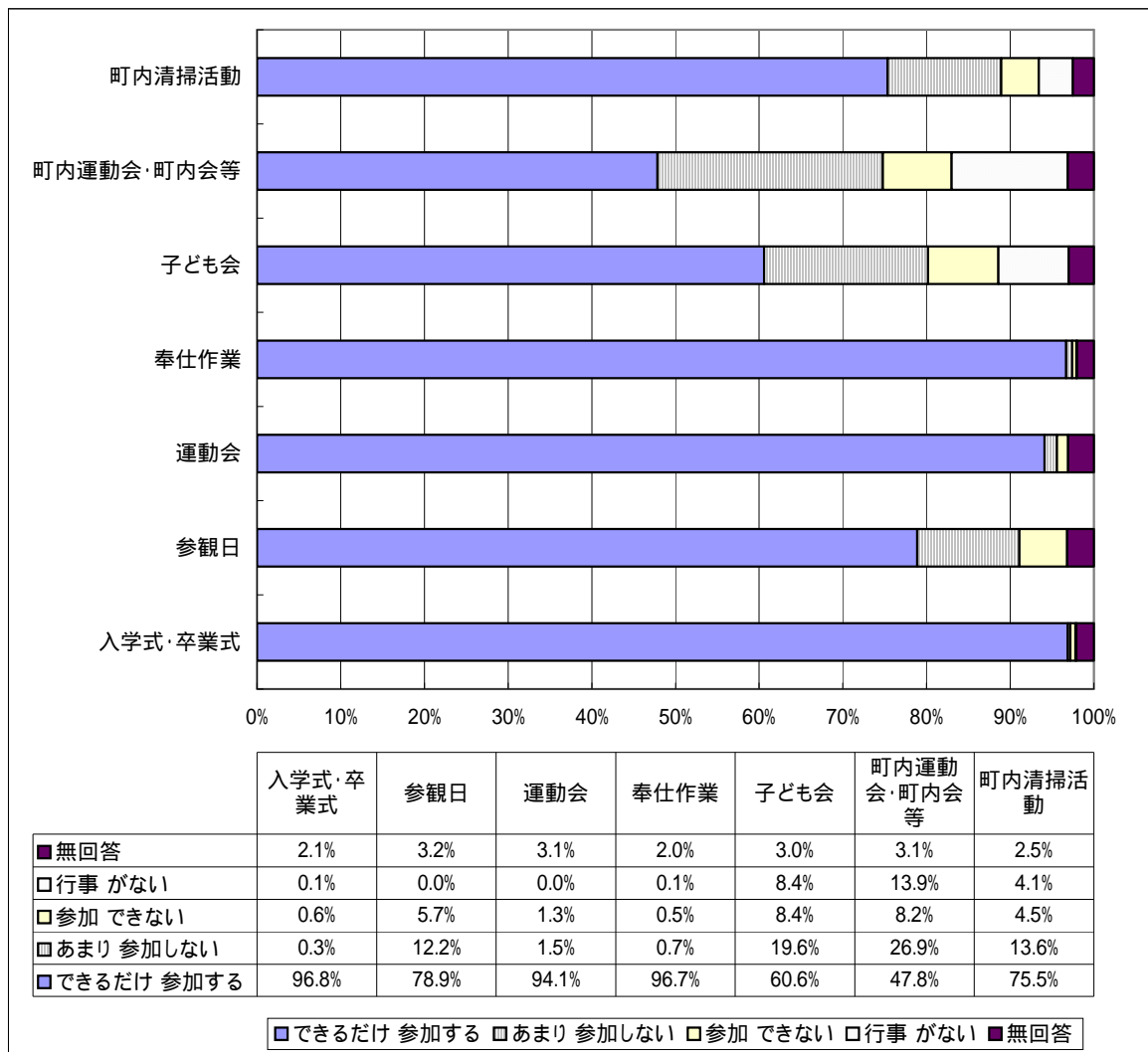
2 学校行事等への親の参加状況

次に、学校行事や子どもが多く参加する地域関連の行事に親はどの程度参加しているのか。代表的な行事について尋ねてみた。図表 4 - 2 は、その結果 (全体のみ) を示す。学校行事は P T A 活動そのものではないが、親の参加率は高い。特に年に 1 回の行事になるとこの傾向が強くなる。「入学式・卒業式」(96.8%) はもちろん、「運動会」(94.1%) に参加する割合は極めて高い。また、奉仕活動 (運動場の草取り等) について、親のほとんどが、「できるだけ参加する」(96.7%) と回答しているのが興味深い。通常学期ごとに開催される「参観日」になると、「できるだけ参加する」の割合は 78.9% と参加率が落ちて

くる。それにしても学校行事への親の参加率は全体的に高いとあってよい。

地域関連行事についてはどうか。「町内清掃活動」については75.5%が「できるだけ参加する」と回答している。しかし、「町内運動会・町内会等」となると「できるだけ参加する」の割合は47.8と半数以下となる。町内会が選択肢の中に入ったことも作用したのかも知れない。「子ども会」についてはもっと高い割合を期待したいところであるが、結果的には「できるだけ参加する」は60%強に止まっている。子ども会役員にまかせておけばいい、という思いが少なからず反映されていると考えられる。

図表4 - 2 学校行事及び地域関連行事への参加状況×全体



最後に、学校行事である「参観日」と子ども関連の地域行事である「子ども会」への親の参加状況を学年別に見ておこう。(表4 - 3 参照)

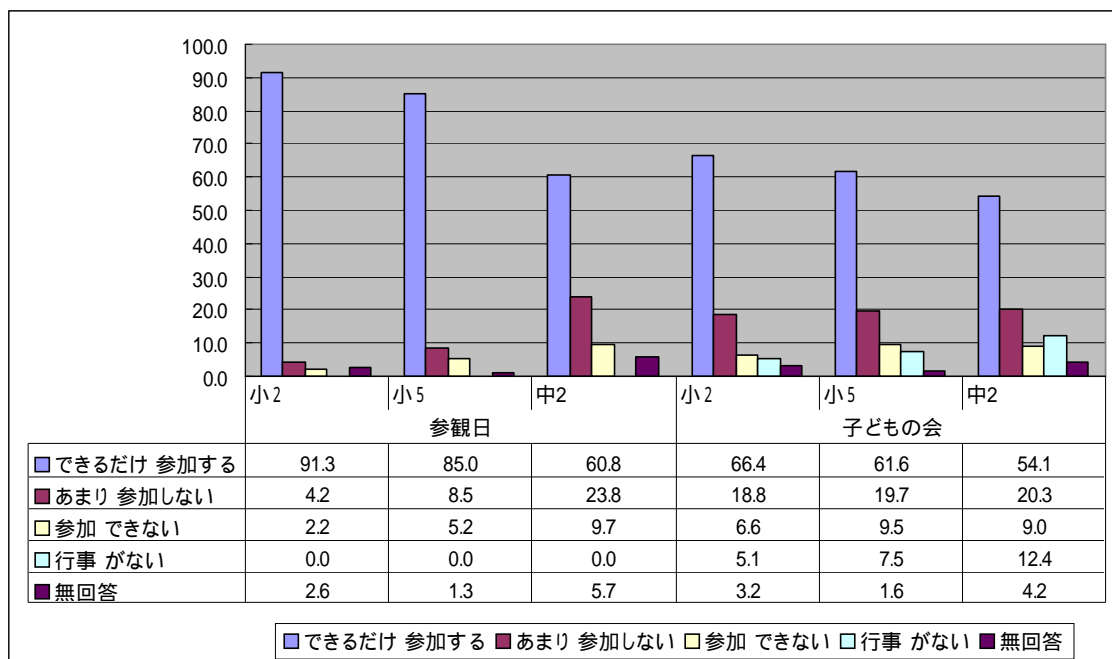
参観日については、「できるだけ参加する」の割合は小学2年生の親が最も高く 91.3%。しかし、この割合も学年が進行するにつれ減少し、中学2年生の親では60.8%に止まる。両者の間に30ポイント以上の開きが見られる。発達段階による違いがあるとしても、この開きは大きすぎる。一般に、小学2年段階の子どもは親の参観を喜ぶし期待も大きい。ところが、思春期（中学2年生）の子どもは逆に、親に授業を見られるのを嫌がる、恥ずかしがる傾向が一段と強くなる。子どもの気持ちを察し、参観を見合わせる親も少なからず存在すると考えられる。

子ども会への親の参加はどうか。「できるだけ参加する」の割合は、小学2年生の親が最も高く66.4%、中学2年生の親は逆に最も低く54.1%。両者の間に10ポイント以上の開きが見られる。しかし、ポイント差は思ったよりも低い。中学生の親の頑張りをもっと評価したい。

ところで、親の子ども会への参加状況を考える前に、特に問題とすべきは、「行事がない」という回答が全体で8.4%存在することである。学年別では小学2年生で5.1%、中学2年生では倍増し12.4%に達する。子ども会は存在するが活動がないのか、子ども会それ自体存在しないのか、この点は定かでないが、地域の青年団の消滅と同時に、地域の婦人会組織も減少傾向にあり、遂に、子ども会もか、という危惧がある。子どもの生活が多様化し複雑化し、子ども会が個々の子どものニーズに対応仕切れなくなっている状況や親の諸事情も理解できるが、子ども会の消滅は子どもにとっての地域それ自体の消滅を意味する。活動の見直しを含め、子ども会の活性化・復活に多いに期待したい。

図表4-3 参観日・子ども会行事への参加状況×学年別

(数字：%)



第5章 自由記述の内容分析

1 内容分析の方法

アンケートの最後に、「本アンケートについてのご意見、または今日の学校教育や家庭教育についてのご意見・ご感想等がありましたら、ご自由にお書きください。」という記述欄を設けた。自由記述欄に何らかの記述をした回答者は全部で93人、全体の4.3%であった。学年別に見ると、小学2年生の親38人(5.5%)、5年生の親27人(3.6%)、中学2年生の親28人(3.9%)であった。この種のアンケートとしては記述者率はかなり低いと言ってよい。

記述内容をいくつかのカテゴリーに分類できるが、個々人の記述内容は単純明快なものから、内容が2つ、またケースによっては内容が3つ以上に渡るものもある。内容が2つ以上に渡る場合は、筆者の判断で、より重要だと思われる内容2つまで取り上げた。この結果、分析対象となる内容は、表5-1に示すように全部で111件となる。カテゴリー別では、「親・家庭教育への批判及び期待」が一番多く全体の31.5%、続いて「学校・教師への批判及び期待」(24.3%)、「アンケート内容の批判及び期待」(16.2%)の順である。

表5-1 カテゴリー別自由記述の内容件数

(数字：%)

	小2	小5	中2	合計
アンケート内容の批判及び期待	8	4	6	18
親・家庭教育への批判及び期待	7	10	10	27
学校・教師への批判及び期待	16	9	10	35
学校週5日制の批判	7	4	4	15
P T A活動批判及び期待	1	4	4	9
その他	4	2	1	7
全体	43	33	35	111

2 カテゴリー別分析

(1) アンケート内容の批判及び期待

アンケートの項目は全部で27項目と多く、しかも一つの質問項目の中に5～8の小項目を立て、3段階、4段階で回答してもらう項目も少なくない。しかし、幸いなことに、項目の多さに対する批判は一つもなかった。自由記述の内容は、「アンケート結果を知らせたい」という要望が最も多く5件。「自分の家庭教育を見直すきっかけになった。」「子育てを反省させられた。」など、プラス評価(4件)もある。批判については、「選びにくい質問が多い。」「あいまいで答えにくい質問が多い。人によって言葉のイメージの捉え方

は多様である。」など、質問の仕方に対するものが4件。小規模校・小規模学級に通う子どもの親から、「学校名や学年や性別がなぜ必要か。親がだれか分かってしまいます。」という匿名性が保証されにくいことへのクレームも2件あった。また、「項目を選ぶだけのアンケートにどんな意味があるのか。時間の無駄である。」「母子家庭にとってこのアンケートは失礼である。仕事の日子どもと関わることは難しい。」など、アンケートそれ自体を否定する手厳しい批判も3件あった。全面否定の批判は置くとして、各項目の問い方で確かに答えにくい選択肢も少なからずあり、この点については大いに反省させられる。

(2) 親や家庭教育への批判及び期待

親を対象としたアンケートではあったが、このカテゴリーの記述件数は予想したほど多くはなかった。件数としては、各人の表現は異なるが、「子どものしつけは、まず、家庭で」という意見が8件と最も多い。子どもの基本的なしつけを学校に任せようとする親や家庭の風潮に対する健全な批判の表明である。また、挨拶ができない親に対する批判や、子どもどころではない、親自身のマナーの悪さを指摘する意見も多く6件。意外なことに、子どもとのかかわり方を反省する親の弁も多く見られた。例えば、「共働きで、日常的には子どもとのかかわりが稀薄なため、それを取り戻すべき、休日には特に会話を心がけている。しかし、子どもの成長についていけぬ焦りがある。この辺のフォローがあればうれしいのだが。」(小2の親)、「自分に至らないところが多く、子どもを通して教えられるところが多くあります。親として成長していきたいと思っています。」(中2の親)、「子どもの友人関係にでかなり悩んでいます。しかし、親としてどうしてやることもできず、悩む息子を励ますことしかできません。しっかり、見守っていきたいです。」(中2の親) など6件。

意見としてはグループを形成しないが、「地域行事や子ども会に非協力の親が多いのに危惧を感じる。」「子どもにはもっと不便を体験させるべき。特に子どもの携帯電話は禁止すべし。」「家庭教育の方法は多様であるがまずは、ほめて育てる、を基本とした教育に心がけるべきである。」など、なるほどと頷ける意見や考えが多く見られた。

(3) 学校・教師への批判及び期待

自由記述は全部で35件であるが、全体的に見て、学校・教師批判というよりは励ましや同情の気持を表明する内容が多くを占めている。まず、半数近く(15件)は、教師は保護者に気を使いすぎ、子どもに優しくすぎるという指摘である。「口うるさい保護者など相手にせず、子どもにもっと厳しく接して欲しい。」(9件)という意見がその代表格である。「子どもに甘い教師が多い。ときどき愛のムチも必要。」と、叱れない優しい教師に対する評価は厳しい。親の中には暴力を肯定する強硬派もいる。「悪いことをすれば厳しく叱るのは当然であるが、時には体罰も必要である。」(2件)と。体罰がなくなった代わりに、「言葉の暴力が増えている。」という指摘もある。体罰はもちろん、言葉の暴力も肯定することはできないが、よいことはしっかりほめ、悪いことは悪いと叱る、メリハリが教育には必

要である。何をどのようにほめ、叱るかは、教師の力量が厳しく問われるところである。厳しく叱ったばかりに取り返しのつかない心の傷を負わせてしまう場合もある。子どもを叱ること、また厳しく接するとはどういうことか、親と教師の共通理解と方法を巡っての合意が求められている。

ゆとり教育との絡みで学力低下に対する懸念も表明されている（４件）。「運動会の練習に２週間も掛けるのはどうか。教科指導はどうなっているのか。」（中２の親）また、「入試に備え、５教科をじっくり教える授業スケジュールにすべきで、選択教科は必要ない。」（中２の親）と。学力低下の問題よりも学級崩壊を生まないために、少人数学級への制度改革に期待する内容も２件あった。

自由記述の中には、指導法の工夫や新しい教育課題であるＡＤＨＤやＬＤ問題にもっと教師は本気で取り組んで欲しいという要望も少なからず存在する（３件）。しかし、多くの親は、教師の責任感や情熱、人間性に期待をかけている（６件）。「先生の指導力（学習面）ばかりが問題にされ、子どもからの信頼が薄れてきたように思える。子どもが楽しく学校に行けるよう、人間的に魅力のある先生であって欲しい。」「子どもが学校を好きになるには、まず、先生が学校生活を楽しまなければ。義務感だけでは、教師をしても子どもはついてこない。」指摘のとおり、教師はもっと自己研鑽を積み、プロ意識を持つべきであろう。しかし、学校教育は教師だけで持っている訳ではない。「教師も完璧ではない。子どもの成長に必要なことについて、親と教師が話し合う機会があればと思う。」（中２の親）この親の意見を大切にしたいものである。

（４）学校週５日制の批判

学校週５日制は、家庭と学校の両方にまたがる問題を持っている。自由記述の意見のほとんどは、学校週５日制を否定しないとしても、批判的に捉えている。批判の焦点は、学力低下への心配である（８件）。「土日は遊んで過ごしています。休日用の宿題やテストが必要だと思います。」「家庭で力を入れないと学力低下を招くのではと心配している」（いずれも小２の親）。「受験を来年に控えているが、休日が多く、勉強しない子どもが不安でしょうがない」（中２の親）

勉強の問題ばかりでなく、時間の使い方の不満もある。「土曜日は学校に行かせて欲しい。親も子も時間をもてあましています。」（小２の親）「とにかく、休みが多すぎる。クラブ活動のないときの子どもの過ごし方に不満」（小５の親）

学校週５日制はゆとりの教育との関連で制度化された経緯もあり、親もゆとり教育との絡みで５日制を批判している。「ゆとりは高校段階で付けとってくるのでは。」「ゆとり教育の一番の犠牲者は子どもである。」「休みが多くなり、子どもはやるべきことが多くなった。これが本当のゆとり教育か？」と学校５日制への親の批判は手厳しい。

残念なことに、この新しい制度を擁護する意見は一つもなかった。確かに、批判の内容に見られるような懸念や課題はある。最近の学力低下論の影響も作用し、学校５日制は批

判にさらせる傾向にあるが、親子が新たに深い関係を取り結ぶ恰好の機会であるとともに、家庭とは何か、家庭教育とは何か、この重要課題を真面目に考えるチャンスでもある。この課題を放棄し、土曜日の学校化が進むようでは、さらなる子どもの問題を生み出すであろう。改めて、学校週5日制の意義と課題を考える必要がある。

(5) P T A活動に対する批判及び期待

本アンケートの作成主体は山口県P T A連合会である。このことも作用したのか、P T A活動に対する意見が9件あった。内容的には評価と批判が拮抗している。「P T A活動に参加して、子ども以上に学校が楽しくなったように思う。みんなP T A活動にもっと参加して欲しい。」(小5の親)「辛いこともありますが、子どものため、学校のために少しでも役立っていると思うと、張り合いが出てきます。」(中2の親)というP T A活動を積極的に評価する意見に対して、厳しい批判も数件あった。「他人の事を問題にする前に、P T Aが今までに何をやってきたか反省すべきである。」(小2の親)「P T Aについてははっきり言わせていただくと、ヒマな親同士が仲良しこよしでやっていけば良いと思います。おそらくパートじゃなく、真剣に生活のために働かなければならない家庭にとっては、かなりの迷惑な活動グループに過ぎません。」(小5の親)などである。

P T A組織は各学校単位で存在し、その活動は多様である。P T A活動が活発な学校、地域では、活動に参加しない、また参加できない親にはかなりの圧力になる場合もある。「各種の行事に参加したいと思っても、曜日や時間、また共働きの親にとっては色々ネックがあり、参加できないことが多いと思います。出来ないことで他の親たちに取り残されているのではと不安になったり、親も子も孤立するようなことがあるのではと思っています。」という意見は、その現実の一面を物語っている。また、「P T Aの行事に参加しないと文句を言う人が多いように思う。学校行事は先生がするもので、P T Aがするものではない。」と、P T Aに対する基本的な認識を欠いた意見もあった。

(6) その他

以上の4つのカテゴリーに当てはまりにくい内容7件を「その他」とした。「岩国市の中学校が給食になることを期待します。」や「子育てや子ども行動等について気軽に相談できる専門的な窓口を身近なところに作って欲しい。」など、個々人の思いを綴った内容が5件。残り2件は、「子どもの人数が少なくなり、一人で登下校することが多く心配です。」「学校の中だけでなく、行き帰りの道でのイジメについても考えて欲しい。」という小学2年生の親の意見であった。

以上、多少強引ではあるが、自由記述の内容を5つの観点から整理した。全体の件数は111と少ないが、各カテゴリーに示した意見や思いは、アンケートに回答してくれた多くの親のそれを代弁していると考えべきであろう。

終章 総括 - 課題と提言

1 成果と課題

本アンケートの主要なねらいは、家庭における基本的なしつけの実態や親子の会話を含む親子関係の在りよう、また、親の子育てに関する思いや期待、さらにPTA活動とのかかわり等から、山口県における子育て、家庭教育の現実の一面を浮き彫りにするところにあった。また、副次的なねらいとして、アンケート結果の分析から導き出される問題や課題を踏まえ、今後のPTA活動の在り方を考える糸口を探ろうとした。

言うまでもなく、子育て、家庭教育の内容は多岐に渡り1回のアンケートで知りうる範囲には限りがある。また、アンケートの内容も必ずしも体系化されたものではない。このことも作用し、全体的に表面的な分析に止まらざるを得なかった。このような限界はあるが、家庭におけるしつけの実態、親子関係の現状、子育て、家庭教育に関する親の期待や不安等の一面をかなりクリアに描き出せたと考えている。全体の傾向や学年差（発達段階差）、性差による分析結果は、家庭教育の現状を振り返り、わが子に何ができ、何が不足しているか、また、親として何処に力点を置いて子どもとかかわっていけばよいのか、これらを考える有益な視点を多く提示してくれるものと信じている。ただ、アンケート項目の多くが、親のわが子の観察評価によるもので、親により評価の仕方に偏りがあることも否定できない。次回、同種のアンケートを企画する機会があれば、ぜひ、親とほぼ同様の内容項目から成るアンケートを子どもにも同時に実施したいものである。今後の課題としたい。

PTA活動に対する評価については、かなり厳しいものがあつた。また、親の中にはPTA組織に対する誤解や無理解も少なからず存在している。子どもの健やかな成長・発達のためにPTAは何をすべきか、何処を見直すべきか。PTA活動の活性化へ向けて取り組むべき課題は多いと言わざるを得ない。

最後に、本アンケートの結果や残された課題等を踏まえ、それを敷衍^{ふえん}して、以下、提言という形で、報告書のまとめとしたい。

2 提言

(1) 基本的なしつけの定着を - 帰宅後の子どもの生活リズムに配慮を

家庭における子どものしつけは、その内容により開始時期は異なるが、排便や洗顔や着衣のしつけ、他者との関係を可能にするコミュニケーション、例えば、「おはよう」、「ありがとう」、「ごめんなさい」という言葉のしつけは、幼児期における最も基本的なしつけ内容である。家庭の中で親から何度となく繰り返し言われ、しつけられていることから、小

学校入学段階ではこの種の内容はほぼ身に付いていることが期待される。しかし、アンケート結果から明らかなように、現実には、朝起きたときに「おはよう」の挨拶のできない子どもは多いし、自分で朝起きられない子どもはもっと多くなる。また、顔も洗わずに学校に行く子どもや朝食を摂らない子どもも少なからず存在する。子どもの生活が大人の生活リズムにあわせられ、夜型に大きくシフトしてきたことも多少関係していると思われる。子どもの発達段階にあわせた家庭の生活リズムを工夫したいものである。

朝食を摂らずに学校に行く子どもの問題は、しつけ以前の問題と考えるべきかも知れない。朝食は、とりわけ子どもにとって、その日の元気の源である。朝食を摂らない子どもは、学力や意欲や行動面で問題を生むケースが多いことが実証されている。この事実を確認しておきたい。

ところで、帰宅後の子どものしつけ内容は家庭により大きく異なるが、学校教育との関連で言えば、「自主的に宿題ができる」態度の形成は、どの家庭でも大切にしたい基本的なしつけ項目の一つであると考えられる。最近では小中を問わず、宿題の量は減少傾向にある。与えられた課題をきちんとこなす習慣の形成は、学校への適応の最低限の条件でもある。学力・意欲の2極化傾向は、小学4、5年段階から始まることが証明されている。親子の信頼関係の中で、小学校の低学年段階から、宿題だけは自主的にこなせる態度の形成を怠らないようにしたいものである。

(2) 親子の会話づくり - 親の生き方を伝えることも忘れずに

子どもの問題行動が多発している今日、家庭の在り方が厳しく問われている。その焦点の一つが、日常的な親子のコミュニケーション不足である。この背景には、共働き家族の増加や子ども部屋の完備、また子どもの塾通いや部活動等の要因がある。それだけに、親子の会話の時間をどのように確保するかは、親にとっての重要な課題である。

一般的に、親子の会話時間は学年が上がるとともに減少してくる。発達段階を考えれば自然な傾向である。ここで注意したいには、中学生段階になると、親子の会話時間が平日で30分以内の割合が急増してくることである。思春期に入ったこの時期の子どもは、友人関係や性や進路等の問題で多くの悩みを抱えている。親に話したくない、話せない課題を持つようになる。また、思春期は、親からの自立を図ろうとする時期でもある。この悩ましい時期の子どもとコミュニケーションを図るのは親にとっても決して容易ではないが、意識的に親から語りかける努力とそのための時間の確保を心がけたい。

もちろん、会話の時間が長ければよいというわけではない。親子がいつまでもべたべたしては子どもの自立にとってマイナスに作用する。大切なのは、時間の長さよりも、会話の密度と話す内容である。アンケートでも明らかになったように、会話の内容として「学校のこと、先生のこと」「勉強・成績のこと」が上位を占めている。親子の会話の接点为学校に焦点化されるのは当然である。気になるのは、会話の内容の中で、「親の生き方」の割合が極端に低いこと、また、「将来の夢」についても予想に反してあまり会話の内容に

なっていない点である。これらは日常的に話す内容でないことを考えれば頷ける。しかし、忘れてはならないのは、親子のつながりは日常的な出来事の確認や安心の保証だけで事足りるものではない。家庭教育の立場から言うと、親は子どもに親自身の生き方や価値観等を態度や言葉で伝えていく役割がある。子どもは親の生き方に学び、夢を抱いて成長していく存在である。この点を失念しないようにしたいものである。

(3) 勉強・成績だけでなく、子どもの生きる力の形成に力点を

勉強ができること、成績がよいこと。わが子に対する親の期待の第1は、ここにある。しかし、多くの子どもはその期待に応えることができないことから、親にとって一番の悩みの種がまた成績・勉強になる。親にとっては、子どもの進路や将来の生活を考えての当たり前の期待ではあるが、今を生きている子どもにとってはその期待がむしろ抑圧となり、親子関係をぎくしゃくさせる要因にも転化しかねない。

家庭は社会的諸能力を訓練する場でもある。成績だけ、スポーツだけという、あれかこれかではなく、あれもこれも大切にしたい。アンケート結果では、子どもに身に付けさせたい能力や態度として多くの親は、生きる力の構成要素である「思いやり」「他人に迷惑をかけない」を最上位に挙げている。向社会性への期待である。また、「自分の意見がはっきり言える」「困難を乗り越える力」も上位に位置している。自立への期待と考えてよい。理想的な回答である。単なる期待だけでなく、実際に子どもの血肉になるようなかわり方を工夫して欲しいと願っている。

とは言え、子どもの多くは、親が子どもの成績を価値の序列のトップに置いていることを知っている。このため、成績に自信のない多くの子どもは、一種の後ろめたさを感じながら生活している。それだけに、親から勉強以外の何でもないことにほめられたり、励まされたりするだけで多くの子どもは元気づき、明日の意欲に繋がってくる。生きる力のベースは意欲にある。学力から落ちこぼれても、意欲からの落ちこぼれを生まない親子の関係を築きたいものである。

(4) 家庭は何のために存在するのか - 子育て（社会化）と大人の精神の安定

家庭の存在理由は何か。学校は人間形成という目標が、企業は利潤の追求（お金儲け）という目標がある。これらに比べて、家庭（家族）はこのような明確な追究目標がない。しかし、家庭が崩壊せずに、その存続を維持するには、次の2つの機能の遂行が期待されている。一つは子どもの社会化（一人前の社会の成員に仕立てていく営み）、もう一つは大人（夫婦）の精神の安定である。

「家庭の役割は何か」というアンケートの質問で、第2位に挙げたのは「心の安らぎの場になる」である。心の安らぎの場（居場所）としての家庭は、大人（夫婦）の精神の安定はもちろん、子どもの教育（しつけ）の出発点でもある。大人の精神の安定とは、夫婦が揃っている場合は、仲がいいこと、相互が信頼しあっていることを意味する。夫婦が

いつもいがみ合い、また夫の暴力で妻が苦悩している状態で、子育てがうまくいくはずがない。夫婦の信頼関係は子育ての前提であり、その中で親子の信頼関係が育つことになる。

子どもの心の成長過程でまず大切なのは、安心の保証である。子どもは、家庭が安全・安心の場であると確認でき、親から愛されていると感じ始めると、心を許し、何でも親に話すようになる。親からの信頼度が高まれば、今度は自信が生まれてくる。安心、信頼、自信、この一連の流れを理解した子育ての実践に期待したい。

(5) 子育ては自分育て - 子どもの成長とともに親の成長を

夫婦仲がよくても、また親が自立的でしっかりしていても、親の子育ての悩みは尽きない。子育てを「今、どのように感じているか」、という質問で、「時々逃げ出したくなる」「しつけに自身がなく不安である」と回答した親が少なからず存在する。当然であり、実際にはもっと多くの親が同じ悩みを持っていると推察される。子育てに悩みや苦悩は付き物であるが、同時に楽しみや喜びも多い営みである。先の同じ質問で、「自分を成長させてくれる」と回答した割合が極めて高かった。「子育ては自分育て」と考えている親が如何に多いかが分かる。

子育ては、子どもが小さいときは体力とエネルギーが、小学生以降になると、知恵と技、そして何よりも忍耐が求められる。一般に、子どもは親が思うようには育たない。子どもは、「親がするようにする」存在である。親の姿や行動の仕方がしつけの質をかなり規定してくる。ここで大切なのは、日常的な親の振るまいの振り返りと子どもの成長にあわせた親の成長である。

「子育てで特に気を付けていることは何か」という質問で、トップは「子どもの健康と安全」であったが、これを除くと、「よく話を聞く」「ちょっとした変化を見逃さない」「一緒に過ごす時間をとる」が上位を占めている。理想的な回答である。とはいえ、言葉でいうのは優しいが、実践となると容易ではない。一緒に過ごす時間の確保はやりくりで何とかなるが、子どもとの会話の仕方や子どもの変化を読み解くには、一定の知識や体験に基づいた技が必要になる。子どもの成長は親のそれに比べてスピードが早く、多くの親はそれに付いていけない状況にある。このことは問題ではない。重要なことは、自分の子どものことは何でも分かっているという態度を改め、子ども理解のために努力する姿勢であり、子どもから学び、子どもと共に成長しようとする謙虚さである。

(6) 「先生 もっと厳しく指導して欲しい」

- 教師への批判ばかりでなく、励ましと期待を

学校におけるいじめや不登校の問題に加え、最近では、子どもの学力や意欲の低下傾向が厳しく指摘され、教師への風当たりが一段と厳しくなっている。学力問題については、国のゆとり教育政策を批判する声が強いが、最終的には学校・教師批判に戻ってくる。このように学校・教師は親から、社会から、またマスメディアから常に批判にさらされて

いる。確かに、急激な社会変化や学校教育改革の進行の中で、学校・教師がそれに十分適応できていない側面は多々ある。また、指導力や倫理や社会性を欠いた教師も少なからず存在する。新しい時代に即応した専門性の向上や高度の倫理観の確立が教師に厳しく求められる。

とはいえ、現実には圧倒的多数の教師が、子どものために献身的に活動している。この事実を看過すべきではない。子どもの問題が起こればすぐに教師・学校批判では、真面目に、身を粉にしてがんばっている多くの教師の意欲を削ぐことにもなりかねないからである。自由記述の分析でも指摘したように、親の教師（学校）への批判の焦点は、子どもに許容的になりすぎ、悪い行為に対しても適切に叱れない教師が増大していることに対してである。社会規範から大きくはずれた行為に対して目をつぶることは許されるべきでないし、そういう教師は厳しく批判されるべきである。しかし、現実には、この種の教師はたとえ存在してもごく一部にすぎない。多くの教師は、何をどのようにほめ、叱るかに苦労している。原則的には、叱るよりもほめる教育の方が教師と子どもの信頼関係を築き易し、子どもの自立にとっても有効であることが、理論的にも実践的にも実証されている。ほめる教育が一般化した理由でもある。

多くの親は「ほめる教育」を否定しているわけではない。「学校の先生に望むことは何か」という質問で、「子どもに合ったほめかた、叱り方」「子どもとの接し方」が上位を占め、いずれも 50%を越えて、3位の「各教科の指導力」(35%)を大きく引き離している。教師への期待は、現実における批判と考えるとよい。子どもの個性や心もちを無視・軽視した、叱る・ほめるが多く見られるからであろう。「子どもの接し方」への期待（批判）もこの点を反映しているものと推察される。一人ひとりを大切にする教育実践の立場から、教師自身の反省といっそうに研鑽が求められる。

教師の問題点や改善点をはっきり表明しつつも、親は基本的に、学校・教師をもっと信頼すべきであると考え、教師も生身のふつうの人間である。親は、教師を育てるという観点から、教師への励ましと期待を忘れないようにしたいものである。

（7）PTA活動の正しい理解と支援を

「PTAとはどのような会か」というアンケートの問で、「先生と保護者の会」という正しい回答は全体で 57%に過ぎず、「保護者の会」や「役員の会」と回答した者が 33%以上も存在している。意外な結果である。しかし、実際にはそのように目に映っているのであろう。言うまでもなく、PTAの本質は、子どもの健やかな成長をめざして保護者（親）と教師が平等なパートナーとして協力・連携するところにある。PTAに対する理解不足も作用してか、PTA活動の意義についての問では、肯定的な評価が上位を占めるものの、「活動がわずらわしい」とする者が 20%を越え、「意味や意義を感じない」が 9%も存在している。PTA活動は親や保護者にとってあまり人気のない活動であることが分かる。何よりも、PTAそれ自体の存在理由が正しく理解されていないのが気になる。

今日、学校は多様な複雑な子ども問題を抱え、家庭との連携なしには機能しなくなりつつある。学校・教師は、いじめや不登校問題に加え、種々の学習障害の子どもへの有効な対応や安全対策にも目を配らねばならない。さらに、本来、家庭ですべき子どもの基本的しつけの尻拭いも求められている。学校や教師の仕事が加速度的に増え、教師の力量だけでは十分な対応が不可能である。親や地域の大人の支援と協力がどうしても必要になってきている。

教師に厳しく倫理を問う事はもちろん大切であるが、親は学校の多様な教育場面への協力・支援を惜しむべきではない。地域には多様な能力・経験を蓄積した有能な人材が数多く存在している。彼ら能力と体験を学校教育に活用したい。教師だけでなく、親やPTA役員が力を合わせ、積極的に学校支援ボランティアを取り込む知恵と努力が求められている。

とは言え、授業や専門的な支援となると誰でもと言うわけにはいかない。しかし、どの親でもできることがある。わが子に対する基本的なしつけである。「親（保護者）として学校にどのような協力が必要か」という質問に対して、他の選択肢の割合を大きく引き離して「遠回りのようだが、しっかりした家庭教育（しつけ）を実践する」（全体で46%）がトップに挙がっている。喜ばしい傾向である。しつけを含む家庭教育の充実は親の教育力の向上が前提となり、家庭教育の成果は今度は、学校の教育力の向上にストレートに反映されてくる。わが子さえよければという考えを越えて、学校の本来的な目標を実現するには、家庭教育の在り方や質が如何に深く関連しているかを正しく理解しておきたい。

（8）PTA活動それ自体の点検・評価と見直しを

本アンケートはPTA活動それ自体の点検・評価を目的とするものではないが、以上を総括し、最後に、PTA活動の今後の課題についてふれておきたい。

PTA活動は地域や学校により、その活動の量と質に大きな違いが見られる。優れた活発な実践も少なくないが、PTA活動は全般的に低調である。ここにはいくつかの理由が考えられる。その大きな理由の一つは、役員を引き受けての問題である。これは役員の選出の仕方とも関連している。一般に、会長のなり手は少なくないが、意欲的に各種の役員を引き受ける親が少ないことである。人材がいらないわけではないが、種々の理由付けをし、引き受けを拒否する傾向が強く見られる。結果的に、PTA役員を引き受けた親たちは、やらされているという意識が消えず、活動全般が低調になる。また、やりすぎると、目立ちすぎると親や教師から非難されるという防衛意識もその背景にはある。

もう一つの大きな理由は、理念とは異なり、PTAが伝統的に学校（校長）の下請け機関として機能してきたことである。学校は教育の専門的組織として素人の口出しを嫌う傾向が強く、学校にとって都合のよい事だけをPTAに肩代わりさせてきた嫌いがある。学校の、この保守的な権威主義が、PTA嫌いを生む一つの要因であったと思われる。また、多くの親たちも、PTAとはこんなものだと思いこみ、できればかわりたくない、役員

などもってのほか、と言う考えや意識を持つようになってきた。

ところで、学校はすでに他からの干渉を排除できる聖域ではなくなっている。今日、学校（教育）は、それ自体が丸ごと点検・評価される時代を迎えている。教育目標は何か、どのようにそれを達成していくのか、成果はどうであったか。これら一連の教育の流れが教師の自己評価はもちろん、子どもの評価、さらに親や地域の評価がこれに加わることになる。教育の透明性の原理の下で、学校教育の営み全てが自白の下にさらされることになる。プラスの成果は置くとして、マイナスの成果が出てきた場合どうするか。親は観察者、傍観者として学校を非難するだけではすまされない。学校・教師の努力は言うまでもなく、問題の解決へ向け、親の支援・協力が不可欠になる。この点の協力体制如何により、学校格差はもちろん、単位PTAの質の格差が拡大する恐れがでてくる。

学校に子どもの教育を全面依存する時代は過去のものとなっている。親が家庭ですべきことは何か、学校・教師しかできないものは何か、また相互に協力・連携すべき事柄は何か。子どもの健やかな成長と学校の活性化には、学校と家庭、さらに地域との連携を視野に収めた有機的な役割分担がどうしても必要である。ここでとりわけ重要になるのが、各種の役割を担う親である。わが子だけでなく、他者の子どもの成長のために、また自分自身の成長のために、さらにわが子が通う学校の活性化とよりよい評価を得るために、何ができるか。どのような活動でもよい。学校支援者（ボランティア）としてかかわる意欲と態度を持つ親を如何に発掘し確保するかが、各学校の焦点的な課題となる。「その活動なら私もできる。」「私もやってみたい。」こういう大人を一人でも多く生み出したい。そのためにも、PTAはこれまでの活動や組織の在り方を総点検し、時代に照応した、意欲的に多くの親を駆り立てるような魅力的な組織に脱皮することを期待して止まない。

経過とお礼

この度のアンケート調査は、山口県PTA連合会が主体となり、山口県家庭教育学会の協力の下に実施されたものである。アンケート票については、PTAで原案が作成され、家庭教育学会の助言等により何度も練り直し完成されたものである。アンケートの配布、回収は単位PTAの協力を得て実施された。集計は山口県立大学 エイミー・ウイルソン 助教授に依頼し、基礎データを整理していただいた。また、図表等の作成については、山口大学東アジア研究科博士課程の学生 周杉さんにご尽力をいただいた。基礎データを下に、本アンケート結果の一部は、2月7日に光市で開催された「全国家庭教育フォーラム山口大会」で、さらに2月19日開催の「山口県家庭教育学会」で発表された。その後、報告書作成に際し、どのような内容構成にするか、また誰が執筆するかが実行委員会で検討され、最終的に筆者（相原）が報告書の作成を任されることになった。

本調査報告書の文責は相原ということになるが、相原原稿がそのまま印刷された訳ではない。PTA側で原稿が精査され、誤字脱字はもとより章構成の在り方や事実認識の誤り等の指摘をうけ、最終的に本報告書が完成された。この意味で、本報告書は山口県PTA連合会と山口県家庭教育学会の共同の成果である。

報告書の作成を終えた今、専門的な角度から言えば、アンケート内容にもう少し体系性が欲しかったこと、また無いものねだりになるが、子どもにも同種のアンケートができていれば、という思いがある。

最後に、ご多忙の中、本アンケートにご協力いただいた保護者のみなさん、そしてアンケート票の配布・回収にご尽力いただいた各単位PTAの役員及び学校の先生方に、協力者の一人として心よりお礼を申し上げたい。分析の甘さや章構成に若干の問題を残すが、アンケート結果を誠実に記述することに努めてきたつもりである。報告書をぜひご一読いただき、家庭教育の充実や見直し、PTA活動の理解に少しでも役立てていただければと願っている。また、各単位PTAの役員の方々やPTA活動に強い関心を持っておられる方には、今後のPTA活動の在り方を考える一助にいただければ幸甚である。

（山口県家庭教育学会会長 相原次男）

「子育てに関するアンケート調査」実行委員会名簿

山口県PTA連合会	会長	松井 繁之
山口県PTA連合会	実行委員長	徳光 康美
山口県PTA連合会	父親母親委員会委員長	豊中 俊行
山口県PTA連合会	父親母親委員会委員	鈴木 秩代
山口県PTA連合会	父親母親委員会委員	石川 悦子
山口県PTA連合会	父親母親委員会委員	源島美恵子
山口県PTA連合会	広報委員会副委員長	河本 淳子
山口県PTA連合会	事務局長	梶原 稔
山口県家庭教育学会	会長	相原 次男
山口県家庭教育学会	副会長	岡本早智子
山口県家庭教育学会	副会長	今井佐知子
山口県家庭教育学会	理事	柳 綾子
山口県家庭教育学会	理事	A・ウイルソン

子育てに関する調査報告書

発行日 平成 17 年 3 月 31 日

発 行 山口県 P T A 連合会

〒753-0072 山口市大手町 2 - 1 8

山口県教育会館 3 階

TEL083-925-6778

印刷所 編集オフィス T 2